



2008 年度

フィールドスタディ報告書

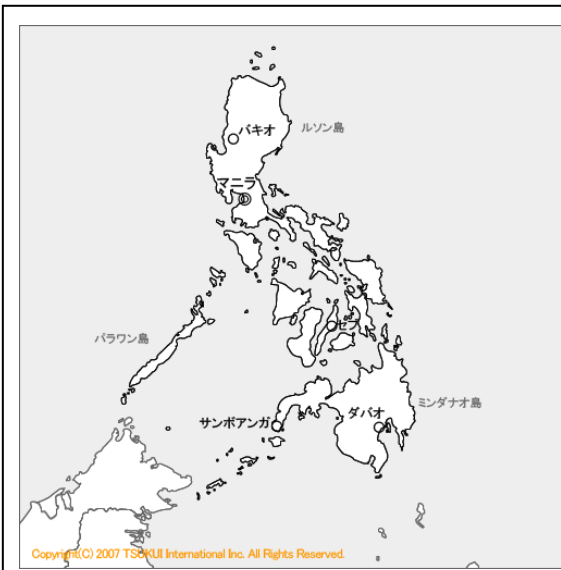
都市スラムにおけるコミュニティ開発

フィリピン・タイ

東洋大学

国際地域学部

編集：秋谷公博・子島進



地図 2 : フィリピン

出典 : http://www.sekaichizu.jp/atlas/eastern_asia/country/philippines.html



地図 3 : タイ

出典 : http://www.sekaichizu.jp/atlas/eastern_asia/country/thailand.html

目次

はじめに	5
第1章 コミュニティ開発とは何か	6
第I部 フィリピン大学セブ校	8
第2章 スケジュールと参加者	8
2-1 スケジュール	8
2-2 参加者リスト	11
第3章 参加学生によるレポート	12
3-1 セブ市の概要	12
3-2 UPセブでの講義	13
3-3 バランガイ・ルスの概要	15
3-4 住居	17
3-5 生活の中の水	18
3-6 女性組織の活動	20
3-7 コミュニティ開発の中のフェアトレード	21
3-8 「参加型」コミュニティ開発ー学園祭での取り組み	23
3-9 ボホール観光	24
3-10 学生間の交流	25
English Summary	27
第II部 チュラロンコン大学	29
第4章 スケジュールと参加メンバー	29
4-1 スケジュール	29
4-2 参加者リスト	32
第5章 タイ王国の概要	33
第6章 講義の概要	34
6-1 タイの文化について	34
6-2 バンコクの都市計画	34
6-3 アユタヤのコミュニティ開発	35
第7章 タイにおけるコミュニティ開発の支援組織	37
7-1 COD I (Community Organization Development Institute)	37
7-2 ドゥアン・プラティーブ財団	37
第8章 バンコクにおけるコミュニティ開発	39
8-1 バンコクの概要	39
8-2 スワンプルーコミュニティ	39

8-3	クロントイスラム	40
第9章	アユタヤにおけるコミュニティ開発	41
9-1	アユタヤの概要	41
9-2	アーカンソークロッココミュニティ	42
9-3	ポンペットコミュニティ	43
9-4	プーカオトンコミュニティ	43
9-5	ランブルアンコミュニティ・農業センター	44
第10章	グループによる研究成果	46
10-1	コミュニティにおける住環境改善事業に関する研究	46
10-1-1	クロントイスラムの住環境問題	46
10-1-2	スワンプルーコミュニティの住環境整備事業	47
10-1-3	アーカンソークロッココミュニティの住環境改善事業	47
10-1-4	まとめ	48
10-2	こどもの教育の重要性と親の意識に関する研究	48
10-2-1	アーカンソークロッココミュニティの教育の活動	48
10-2-2	プーカオトンコミュニティの教育の活動	49
10-2-3	クロンタキアンコミュニティの教育活動	50
10-2-4	まとめ	50
10-3	コミュニティにおける衛生環境改善についての研究	51
10-3-1	クロントイスラムの衛生環境改善に対する活動	52
10-3-2	ポンペットコミュニティの水の浄化活動	52
10-3-3	アーカンソークロッココミュニティの衛生環境改善活動	53
	English Summary	55
	まとめ	57
	引用文献	58

はじめに (秋谷公博・子島進)

本報告書は、2008年度に実施された国際地域学部海外研修のうち、「コミュニティ開発」という共通点をもつ2つの研修の成果を合同でとりまとめたものである。フィリピンとタイでの現地研修・調査の成果をもとに執筆された学生の報告に続いて、両者の比較検討を最後に収録している。これは合同ゼミでの議論を反映した文章となっている。まだ十分に内容を深めるにはいたっていないが、今後の研修参加者や引率教員の参考になれば幸いである。

それぞれの研修の正式名称は下記の通りである。

1 UPVCC-Toyo University Joint Summer Workshop '08 "Community Development and Urban Poor in Cebu City".

2 Toyo Summer Workshop 2008 Program "City Planning and Community Development" at Chulalongkorn University.

1はフィリピンでの研修であり、セブ市で実施された。UPVCCは、「フィリピン大学セブ校」(The University of the Philippines in the Visayas, Cebu College)の略称である。同校での講義と、コミュニティ開発のモデル地区となっているセブ市バラングイ・ルスでの調査が主たる内容であった。8月31日から9月12日までの研修に、計18名(国際地域学科15名、国際観光学科3名)の学生が参加した。期間中、学生たちは講義と調査に積極的に取り組んだ。帰国後は、自らの知見を情報発信すべく、上毛新聞において「セブ島に学ぶ」というレポートを10回にわたって連載した(内容は、学部HPから確認できる。<http://www2.toyo.ac.jp/%7Enejima/08UPCebu01.htm>)

2はタイでの研修であり、バンコク・アユタヤの都市問題やコミュニティ開発について学ぶことを目的とした。8月31日から9月13日までの14日間、国際地域学科学生8名、国際観光学科学生2名の計10名が参加した。チュラロンコン大学およびラーチャパット大学アユタヤ校での講義では、タイの歴史と文化、バンコクの都市計画、アユタヤのコミュニティ開発について学んだ。現地調査では、バンコクとアユタヤの都市貧困層による生活・住環境改善への取り組みについての定性的なデータを収集した。バンコクのドゥアン・プラティープ財団、クロントイスラム、スワンプルーコミュニティ、アユタヤのアーカンソークロコミュニティ、ポンベットコミュニティ、プーカオトンコミュニティ、農業センターを訪れ、ヒアリングを中心とした調査を実施した。研修期間中に非常事態宣言が出され、研修の継続が危ぶまれるなど予期せぬ事態もあったが、参加学生は額に汗をかきながら現地調査を実施し、タイのコミュニティ開発について多くを学ぶことができた。

フィリピンもタイも、NGOや住民組織の活動がさかんな国として知られている(重富2001)。両国での「コミュニティ開発」に関する研修は、参加者に非常に実り多い時間をもたらしてくれた。最後に、両国の大学やNGO、関係諸機関の皆様に深く御礼申し上げる次第である。

第1章 コミュニティ開発とは何か（勝又綾奈・横尾真純）

今回のUPセブとチュラロンコン大学における海外研修は、コミュニティ開発が共通のテーマであった。ここでは、*Community Development: Breaking the cycle of poverty* (Swanepoel and De Beer 2006)の第5章に依拠しつつ、コミュニティ開発の特徴について説明していく。

コミュニティ開発の特徴として、同書では以下の4点を挙げている。

- 1) 集団としての活動
- 2) ニーズによる方向付け
- 3) 目的による方向付け
- 4) 草の根レベルでの活動

まず1)であるが、コミュニティ開発は、ある問題を共有する人々が自発的に集団をつくって行う活動である。この住民組織が成果をあげることができれば、他の人々の参加を促進することにもなる。

続いて2)であるが、複数の住民が参加するということは、多様な価値観が表明されるということである。そのため、自分たちの中で最も優先順位の高いニーズについて人々が話し合いを行ったうえで、合意を形成することが求められる。住民が物事を決めるプロセスそのものが、参加型のコミュニティ開発においては重要である。

ニーズの明確化を受けて、3)の目的の明確化も求められる。目的は、具体的なものでなければならない。例えば、「つきっきりで幼児の面倒を見なければならないため、女性が働きに出ることができない。女性が収入を得るには、子供を預かる施設が必要だ」。これが最優先のニーズとして挙げられたとすると、具体的な目的は、「保育所の設置」となる。そして、設置する場所、誰の子供を、何人まで預けられるのかなどといった点について具体的に決めていく必要がある。

4)として、コミュニティ開発は、草の根レベルで行われなくてはならない。すなわち、官僚やNGOの職員が主導するのではなく、住民たち自身で運営していくことが大切である。初期の段階では、官僚やNGO職員の的確な指導なしには、組織を立ちあげることも難しいだろう。しかし本当の意味での草の根とは、「土の下に隠れている部分」すなわち社会の下層で暮らす貧しい人々自身がコミュニティ開発に携わるということである。

参加には、行政やNGOによる「操作」から、住民自身による「自己管理」まで様々な程度がある。住民参加の程度が増すにつれ、人々が共同の目的達成のために相互に責任を分かち合い、リスクを負担する割合も増加することになる(斎藤 2002 p.17-18)。以上の4点が理念にとどまり、失敗する開発プロジェクトは多いそうである。

では、私たち(勝又・横尾)が訪問したセブの balan-gay・ルスはどうだろうか。balan-gay・ルスにおけるコミュニティ開発は、全般的にこれらの特徴を備えているように感じられた。秋学期のゼミの最後に行われた合同発表会におけるタイの報告からも、同様の

印象を受けた。本報告書全体が、コミュニティ開発を扱っているので、ここではバランガイ・ルスの女性組織の一例だけを簡単に挙げておくことにする。バランガイ・ルスの住民、とりわけ女性たちの間では、家庭内暴力をなくしたいという強いニーズがあった。女性たちはバンタイ・バナイ(3-6 参照)という組織を結成し、暴力を受けた女性のケア、夫への警告、セミナーによる啓発などに取り組んでいる。この活動は、初期の段階からリホック財団という全国的な組織の支援を受けているが、バランガイ・ルスの女性たちがその支援に依存してしまっているようには見受けられなかった。むしろ、彼女たちによる「草の根の活動」であるという印象を受けた。

第 I 部 フィリピン大学セブ校

第 2 章 スケジュールと参加者

2-1 スケジュール

DATE	ACTIVITIES
August 31 (Sun)	<p>PR433 Narita to Cebu (2:30-6:35. 5 hours)</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ Arrival at Mactan International Airport 7:00 ▪ Dinner in Golden Cowry 7:30-9:00 ▪ Check-in Montebello Hotel 9:30
September 1 (Mon)	<p>Morning Session</p> <p>Welcome and Greetings (9:00 – 10:00)</p> <p>Campus Tour (10:00-10:30)</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ (Lecture) Cebu City Situationer: Engr. Paul Villarete, Cebu City Planning and Development Officer (10:30 – 12:00) <p>Lunch Break (12:00 – 1:00)</p> <p>Afternoon Session (1:30 – 3:00)</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ Barangay Luz Hall
September 2 (Tue)	<p>Morning Session</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ (Lecture) Poverty Situationer: Prof. Felisa U. Etemadi, SSD, UPVCC (8:30 – 10:00) ▪ (Lecture) Poverty Reduction: Government and People’s Response: Mr. Albert Ligan Senior Economic Development Specialist, NEDA 7 (10:00 –11:30) <p>Lunch Break (12:00 – 1:00)</p> <p>Afternoon Session</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ City Tour (1:30 – 6:30) Taboan Market, Magellan’s Cross, Sto. Niño Basilica, Fort San Pedro, Casa Gorordo, Capitol, Taoist Temple.

<p>September 3 (Wed)</p>	<p>Morning Session</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ (Lecture) Urban Planning and Community Development: Mr. Bimbo Fernandez, Cebu City Administrator (8:30 – 10:30) ▪ (Lecture) Fair Trade in Japan with special reference to Philippines: Dr. Nejima Susumu, Associate Professor, Toyo University (10:30-12:00) <p>Lunch Break (12:00 – 1:00)</p> <p>Afternoon Session</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ Discussion on the Research Topics: Nejima Susumu (1:00-1:30) ▪ (Lecture) Gender and Governance Part 1: Ms. Livian Dandal (assistant of Mrs. Teresita Fernandez) (1:30 – 2:00) ▪ Gender and Governance Part 2: Mrs. Teresita Fernandez, Executive Director – Lihok Pilipina(2:00 – 3:30) ▪ Japanese songs by Pilipino students (3:30-4:00)
<p>September 4(Thu)</p>	<p>Morning Session</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ (Lecture) Urban Governance and Practice: Dr. Jiah Sayson, Chair, Dept. of Political Science (8:30 – 10:00) ▪ Discussion on the Research Topics: Nejima Susumu (10:00 – 11:30) <p>Lunch Break (12:00 – 1:00)</p> <p>Afternoon Session</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ Field Tour (1:30 – 6:30) Pagtambayayong in Mambaling, Cebu City Gawad Kalinga in Budlaan, Talamban, Cebu City
<p>September 5 (Fri)</p>	<p>Morning Session</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ Southern Partner Fair Trade shop (8:30-10:30) ▪ City Hall, interview with Engr. Arnold Fabillar (11:00 – 12:00) <p>Lunch Break (12:00 – 1:00)</p> <p>Afternoon Session</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ (Lecture) Relationship between Japan and the Philippines

	<ul style="list-style-type: none"> ▪ Part 1: Fair Trade of Bananas: Dr. Nejima Susumu, Associate Professor, Toyo University (1:30 – 2:15) ▪ Part 2 : Understanding Filipino Migration To Japan: Perspectives and Reflections : Dr.Maria Rosario (Cherry) Piquero-Ballescascas, Professor, UPVCC (2:30-3:30)
September 6 (Sat)	<p>Bohol Tour Day 1</p> <p>Super Cat: Cebu to Tagbilaran (8:00-10:00)</p> <p>11:00-7:00 Baclayon Church, Traditional Pastry Demonstration, Baclayon, Loay River Cruise, Natural Chocolate Demonstration, Chocolate Hills, Loboc Tarsier</p> <p>7:00 Palm Beach Hotel</p>
September 7 (Sun)	<p>Bohol Tour Day 2</p> <p>Free Schedule (up to 1:30)</p> <p>Shopping in Island Mall (2:45-3:45)</p> <p>Super Cat: Tagbilaran to Cebu (4:45-6:45)</p>
September 8 (Mon)	<p>Field Work – Day 1</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ Discussion on the Research Topics: Nejima Susumu (9:00 – 10:00) ▪ Different sites in Barangay Luz with assistants from UP (10:00 – 12:00) <p>Lunch Break (12:00 – 1:00)</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ Different sites in Barangay Luz with assistants from UP (1:00 – 4:00) ▪ Discussion about FW at the Hotel function room: Nejima Susumu (8:30-11:00)
September 9 (Tue)	<p>Field Work – Day 2</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ Different sites in Barangay Luz with assistants from UP (8:30 – 11:30) <p>Lunch Break (12:00 – 1:00)</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ Different sites in Barangay Luz with assistants from UP (1:30 – 4:30)

	<ul style="list-style-type: none"> ▪ Discussion about FW at the Hotel function room: Nejima Susumu (8:30-11:00)
September 10 (Wed)	<p>Preparation for Presentations at the Hotel function rooms: Nejima Susumu</p> <p>1. 9:00-12:00 2. 2:00-5:00 3. 8:00-12:00</p>
September 11 (Thu)	<p>Morning Session</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ Field Work Presentations: organized by Nejima Susumu (9:30 – 12:00) <p>Lunch Break (12:00 – 1:00)</p> <p>Afternoon Session</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ Awarding Ceremony and Farewell Party at the UPVCC – AVR (1:00 – 3:00) <p>Free time</p>
September 12 (Fri)	<p>Departure for Japan</p> <p>Hotel to Airport (5:45-6:10)</p> <p>PR434 Cebu to Narita (7:40-1:25)</p> <p>Arrival at Narita International Airport 2:00</p>

2-2 参加者リスト

引率教員：子島進。

国際地域学科：井上千里、植竹聡美、宇佐美真弓、勝又綾奈、金子華英、鯨井美沙、興柁美樹、手塚詩織、高藤薫、西本勇太、横尾真純（2年）。今井泰世、江口麻衣子、BHOJ RAJ PAUDEL、山本路子（3年）。

国際観光学科：小尾直美、中川知美、若林奈々絵（2年）。

第3章 参加学生によるレポート

本章では、UPセブの研修に参加した学生たちが、現地で得た知見をもとに、セブ市の概要から「コミュニティ開発」の諸側面までを、分担して執筆に当たっている。

3-1 セブ市の概要（今井泰世・西本勇太）

フィリピンは7000以上の島からなる島嶼国家である。この国は大きくルソン、ビサヤ、ミンダナオの3つの地域に分かれている。首都マニラの南方500キロに位置するセブ島は、ビサヤ地方の中心地として歴史上重要な役割を果たしてきた。1521年、マゼラン率いるスペイン艦隊が訪れ、フィリピンに初めてキリスト教を伝えたのも、ここセブ島での出来事である。現在も南フィリピンの経済的・文化的中心地として、また国際的なリゾートとして繁栄し、毎年多くの外国人観光客を迎えている。近年、目立つのが韓国人の語学留学の増加である。高等教育を受けたフィリピン人は流暢な英語を話し、また他の地域に比べて治安がいいので、安価に英語を学ぼうとセブを訪れている。

セブ市では、330平方キロに約66万人が居住している。海岸沿いの平地が都市部であり、ここに人口の8割が集中している。都市部の人口密度は1平方キロにつき1万人を超えており、とても高い。後背地には273平方キロの丘陵部が広がっているが、その人口は全体の2割にすぎない（Etemadi 2002 p.8-10）。

セブの都市部の特徴は、貧富の差が激しいことである。急速な産業化と都市化が進み、観光地としても栄えているセブには、「ビバリーヒルズ」と呼ばれる超高級住宅街で、雇い人に囲まれて暮らしているお金持ちもいる一方で、人口の半分以上は極端に貧しい生活をしている。観光客向けの高級ホテルの目の前や、高額所得者が住む警備員付きの住宅街の丘の下に、掘っ立て小屋が連なる地区が、セブには点在している。不法に占有している状態がほとんどであり、このような地域に居住している貧しい人々のことをスクオッターと呼ぶ。不法に土地を占拠しているということで、行政からのサービスもほとんどない状況である。

セブ市の失業率は、16%という高い数字となっている（1999年）。近隣の地方からセブに出稼ぎに来ても、教育を受けていない人は、英語が話せなかったり、事務ができなかったりという理由で観光産業や銀行、不動産、保険などの主要なサービス業で働くことはできない。路上で物を売ったりするインフォーマルセクターで働き、収入も不安定である。このため、貧困の状態からはなかなか抜け出すことができない。

私たちは今回、フィリピン大学セブ校で「都市貧困層におけるコミュニティ開発」に関する講義を受けた。講師は、社会学の教授、セブ市役所の地域開発担当者、住民の生活環境改善に取り組んでいるNGOの職員などであった。講義を受けてわかったことは、セブ市がコミュニティ開発において、世界でも先進的な取り組みをおこなっているということであった。この分野において、貧しい住民の組織とフィリピン国内外のNGO、そして行政（自治体）の三者が積極的なパートナーシップを結んでいる。その結果、500以上の住民組織が



丘上の道教寺院から見たセブ市の遠景

形成され、お互いにネットワークを広げている。フィリピン国内だけでなく、海外の行政やNGOからも注目されているこの活動に大きく貢献してきたのが、トーマス・R・オスメーニャ市長と、都市貧困者運動の指導者のビンボー・フェルナンデス氏である。高校生時代、同級生だったという二人が、スラムの住環境の改善や、不法に住んでいる土地の権利を住民が取得できる仕組み作りに取り組んできた。このほかにも、セブ市は、住民とNGOが市の開発計画に直接携われるような制度を設けている。ストリ

ート・チルドレンへの教育支援プロジェクトも推進している。

3-2 UPセブでの講義（宇佐美真弓・手塚詩織）

フィリピン大学はマニラ校・ミンダナオ校・ロスバニョス校・バギオ校など国内に10のキャンパスを持つ国立大学で、法学・医学・政治学・人文社会学などさまざまな分野の教育を行っている。今回のワークショップではセブ校で「コミュニティ開発と都市の貧困問題」に即した内容の講義を受けた。

コミュニティ開発とは、コミュニティ（地域）の住民が、特定の問題やニーズに対して目標を設定し、その解決のために集団でおこなう活動である。特に貧しいコミュニティに住む人々がその意思や権利を訴えるには、団結して問題解決に取り組むことが大切であり、セブ市では行政やNGOが彼らの組織化を支援している。この種の草の根の開発で強調されるのは住民参加であり、人々の意思に沿った開発を行うべきであるとされている（第1章参照）。

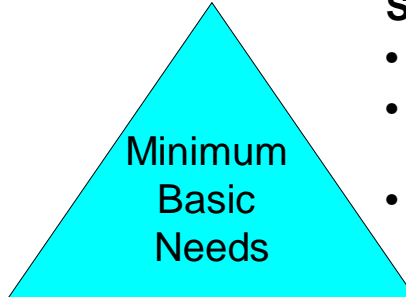
貧困、都市開発、ジェンダーなどの専門家が、私たちに興味深い講義をしてくれたが、日本の大学で受けるのとはまた違った環境の中で、どんな話が聴けるのだろうかという期待と、理解できるだろうかという不安があった。それぞれの講義は英語で行われ、普段聞きなれない専門用語もでてきたが、まずは自分の耳と目で理解できるように、メモを取るとはもちろん、授業中はいつにも増して集中して聴いていたように思う。子島准教授による日本語での要約が、私たちの理解を助けてくれた。

講義は全部で9つ受けた。セブ市の職員やフィリピン大学教授、女性団体の代表者など多彩な講師陣が内容の濃い講義をしてくれた。「セブ市の概要」、「貧困の定義」、「都市計画とコミュニティ開発」、「ジェンダーとガバナンス」など、様々な観点からセブ市の貧困問題と開発を学んだ。とりわけ、フェリーザ・エティマディ教授の講義で示された「MBNの三角形」（次ページ図参照）によって、人が最低限必要とするものや状況、そして貧困概念の多様化についての理解を深めることができた。

The Data Framework: MBN

Enabling

- Basic education
- People's participation
- Family Care and Psycho-Social Needs



Security

- Shelter
- Peace and Order
- Income and Livelihood

Survival

- Health
- Food and Nutrition
- Water and Sanitation
- Clothing

NATIONAL STATISTICAL COORDINATION BOARD

東洋大学からは、子島准教授と3年生のグループが「フェアトレードを通してみる日本とフィリピンの関係」についてプレゼンテーションを行った。フェアトレードの日本での現状を、フィリピンの女性や少数民族が作った商品を通して紹介したので、セブ校の教授や学生さんからも質問やコメントがたくさん出て賑やかな講義となった。

講義中は、常に理解を深めようと、疑問や意見を英語で講師に伝えた。講師のみなさんは全員真剣に答えてくれたので、それがまたやる気や自信につながったと思う。現地の学生と同じ講義を聴き、時間を共に過ごすことで、意見交換することもできた。このような授業は日本ではなかなかできないことだと感じた。フィリピン大学での授業環境はとても心地よく、私たちにとって貴重な体験になった。講義を受けた後は、セブの町をまた違った角度で見ることができ、新たな魅力を見つけられた気がする。そして講義で学んだこと



UPセブでの講義風景

を受け、後日私たちはグループごとにフィールドワークを行った。

宇佐美が一番興味をもった講義は、セブ市の行政官ビンボー・フェルナンデス氏の「都市計画とコミュニティ開発」だった。セブ市では多くの貧困層が存在するが、それを改善するために政府だけでなく、NGOや住民組織の相互協力が進んでいた。貧困をなくそうとするならば、そこに住む人々が自らを組織化し、行動していくことが不可欠だということを学んだ。貧困の解決とは、政府

の一方向的な援助でどうにかするものだと思っていたが、実際に貧しい暮らしを強いられている人々が団結して問題に立ち向かっていくことが重要であり、それこそがコミュニティ開発の原点なのだと理解することができた。

手塚が面白いと思ったのは、フィリピン大学のマリア・バレスカス教授（通称チェリー先生）の講義である。今回の研修のコーディネーターでもあるチェリー先生は日本留学の経験をもち、その講義は英語と日本語の入り混じった不思議な雰囲気だった。国際結婚や就業というテーマを通して、日本とフィリピンの関係を論じた講義は、男女格差や女性の地位向上について興味をもつ私にはとても参考になった。

3-3 バランガイ・ルスの概要（興梠美樹・若林奈々絵）

セブ研修の目的の1つに、バランガイ・ルスでの調査があった。ここでは、このバランガイ・ルスについて報告をする。

「バランガイ」とは集落を意味する言葉だが、もともとの意味はタガログ語の「小船」である。人々が船にのってやってきて陸地にたどり着き、そして集落を形成するというイメージである。海と島の国であるフィリピンらしい言葉である。フィリピンのバランガイは、住民から選出される役員（バランガイ・キャプテン）を中心として地域の諸問題の処

理に当たっている。つまり、地域に対する共同管理性を持っており、日本の町内会・自治会の類似組織として位置づけられている（長坂・中野：2000、p.90）。

私たちは、セブ市には80あるバランガイの1つであるバランガイ・ルスを訪れ、スラムの生活について調査をした。このスラムの起源は、1956年4月の大火事である。このときにスラム地区から焼きだされ、ホームレスとなった住民がたくさん出た。大統領の支援を受けたセブ市長の尽力で、彼らのためにバラックが作られた。この一画が、大統領夫人の名前「ルス」をとってバランガイ・ルスと名付けられ、次第に周囲にひろがって、広大なスラム地区になったのである。現在、20平方キロの土地に1万5000人が住んでいる。バランガイのさらに下の行政単位を「シティオ」と呼び、



バランガイ・ホール

ルスには16のシティオがある（Abellana、City Central、Kalinao、Lubi、Mabuhay、Nangka、New Era、Regla、San Antonio、San Roque、San Vicente、Sta. Cruz、Sto. Nino I、Sto. Nino

II、Sto.Nono III、Zapatera)。これらは、住民たちが以前住んでいたスラムの名称をそのまま受け継いでいる。

バランガイ・ルスは、貧困地域の住民が自分たちの手で社会・経済的な状況の改善に取り組む「コミュニティ開発」のモデルとして知られている。住民組織やNGOが何十もあり、活動している。コミュニティ開発のシンボルとなる建物が、「バランガイ・ホール」と呼ばれる3階建ての多目的ホールだ。1階には、受付と健康センターがある。健康センターに医者・助産婦・歯科者・看護婦がそれぞれ1人ずつおり、12人のヘルスワーカーが常駐している。彼らの給料は政府から支払われ、受診者の治療費もほぼ政府により支払われている。2階は事務所になっている。3階は100以上のイスがあり、ミーティングの場として、多くの住民組織が使っている。また、女性たちの生活協同組合活動の一環として、リサイクル・バッグ作りが行われている。

バランガイ・ルスには、コミュニティ開発の歴史があり、さまざまな活動が展開している。まず、1988年にCMP（Community Mortgage Program）が始まった。これは都市貧困層の住宅と土地への要求に対する融資プログラムであり、都市に住むスクオッターに彼らが不法占拠している土地を購入する可能性を与えたと評価されている。（アンソレーナ2007 p.70）。1988年には、経済支援・融資活動をおこなう多目的協同組合（BLHMP C）も結成された。1994年には、Bantay Banay（女性組織）が結成された。その活動目的は、ジェンダー問題の改善である。その後も、バランガイ・ルスでは、環境改善活動や、レンタルハウス事業など多くのことが行われている。

これらの活動によって、他のスラムと比べると、バランガイ・ルスの住環境はだいぶ改善されている。水・電気・ガスなどの供給があり、日常生活を送るのに不便なことはない。子供に十分な教育を受けさせることにも力をいれている。そのためにも、安定した収入が必要であるとして、女性たちが自分たちで仕事を積極的に作り出している。ジュースの空きパックを材料に、子供を持つ母親たちがミシンを使いひとつひとつ手作りで仕上げるリサイクル・バッグに加えて、お弁当の配達やネックレス作りなども行っている。もちろん、まだ改善しなくてはいけない点も多々もあり、長年住民組織の女性リーダーとして活躍し、現在ではバランガイ・キャプテンを務めるニーダ・カブレラさんも、「衛生や健康を保つことは、貧困を改善していくために重要なポイントだが、排水施設が整っていない」と言っていた。

50年の歳月を経て、バランガイ・ルスは大きく変化している。周辺地域は、近代的なショッピングモールや高級ホテルの建設によって、セブ市有数の商業エリアへと変貌を遂げた。その影響もあってか、バランガイ内部の経済格差が生じつつあるように感じた。この変化に関する調査と研究は、今後の大きな課題である。

3-4 住居（勝又綾奈・鯨井美沙）



バランガイ・ルススの住居の外観

『世界の貧困問題と居住運動』は、人間が安心して生きていくために、とりわけ住居が重要だということを強調している。住居は安心して寝られる場所を提供し、衛生という面からも、生活を清潔に保つ役割を果たしている（アンソレーナ 2008）。

私たちのグループは調査テーマを「住居」とした。調査は2日間かけ、UPセブの学生と一緒にバランガイ・ルスを歩き、通訳をしてもらいながら、住民の方々にインタビューをした。

インタビューに際しては、年齢や家族構成、世帯の月収といった基本的な事項をまず質問した。それから、その家の価格や築年数、水道や電気などの公共サービスが供給されているのか、現在の家に満足しているかなどを聞いた。実際に家の中に入って写真も撮らせてもらうことができた。調査した住宅は16軒だが、そのほとんどが予想以上にきれいだった。大部分が二階建てとなっていて、電気・水道・ガスといった基本的なインフラが整っている。バランガイ・ルスの歴史が60年に達しているということで、掘っ建て小屋の集合体のような最近できたスラムとは全然違うことが、一目瞭然である。ただし、屋根はトタンで出来ていて、雨が降ると雨漏りが生じてしまう。人々は雨が降ると、毛布を使って雨に濡れないようにしたり、バケツで水を受けるといった対処をしている。

私たちの想像と全く違って驚いたのは、多くの家電製品がそろっているということだった。テレビ・DVDプレーヤー・CDラジカセ・ラジオ・オーブントースター・電話・冷蔵庫・時計・扇風機・炊飯機がほとんどの家にあった。

16世帯の月収は、同じスラム暮らしといっても、2,500ペソから30,000ペソまで大きな開きが見られた。最も収入の多い世帯では、家が広くトイレが2つあり、祭壇専用の部屋も設けられていた（16軒すべての家に祭壇がある）。電化製品の数も他の家より多く、冷蔵庫や電話、扇風機はそれぞれ2つずつ、ステレオや最新型DVDプレーヤーもあった。逆に収入が最低の家は、玄関らしきところにさえドアがなく、ただスペースを区切って暮らしている、といった状態で生活が困難に見えた。この家だけは電化製品を持っていなかった。家具もほとんど無く、生活の大変さがうかがえた。しかし、この家にもイエス・キリストのポスターが祭壇代わりに壁に貼ってあり、キリスト教への強い信仰が感じられた。

調査を行う前は、スラムの家はもっと狭く、家具もわずかしかなだろうと考えていた。なぜこんなにも電化製品を持っているのか尋ねたところ、答えは「第一に娯楽を求める」であった。お金がちょっとでも貯まると、テレビ、そして次にCDやDVDプレーヤーを購入するという。ただし、どの家にもなかったのが洗濯機で、一番収入の高い家にもなかった。

人々は洗濯板と桶があれば、それで事足りると思っているようである。

スラムでは「貧しい人が劣悪な環境状態で暮らしている」という予想を裏切って、バランガイ・ルスの内部の多様性を知ることができたのが、今回の調査の一番の収穫となった。

最後に調査について、付け加えておきたい。はじめは順調だった調査も、途中で住民に立ち退きを迫る政府の関係者かと疑われ、なかなか快くインタビューに応じてもらえない場面もあった。その背景には、「93-1プログラム」と呼ばれる土地問題がある。

これは、それ以前に行われた「コミュニティ抵当プログラム」(CMP=Community Mortgage Program)と同じく、土地の権利を持たずに居住している住民にとっての土地権利取得プログラムである。CMPは1988年に導入されたが、土地を不法に占拠している住民(スクオッター)を組織化し、その住民グループが政府から融資を得て、自分が暮らしている土地を購入し、合法的な所有者になるというものである。政府が土地代金を地主に先払いし、コミュニティの住民はその代金を分割で支払う。

1990年代に入ってから、さらに多くの人々がバランガイ・ルスに移住してきたが、その土地はセブ州政府の所有地であった。1993年、州政府は、この移住者たちに「5年のうちに代金を支払えたら土地を与える」と決め、契約を結んだ。これが「93-1プログラム」である。5年後、代金の支払いを終えることができなかった住民が出たため、更に5年間の延長期間を与えることになった。しかしそれでも代金を支払えない(支払わない)住民が出た。州政府との契約は終了し現在にいたっているが、バランガイ・ルスの近くに大型ショッピングモールや高級ホテルができて地価が上昇しているため、州政府はここを商業地区として再開発する計画を持っているとされる(セブ市は「スラム住民とのパートナーシップを推進する」基本政策で有名になったところだが、市と州の意向は異なる。行政当局の動きも一枚岩ではないことがわかる)。このスラムの価値が上がってきていることは、近年、安価な家を求めてバランガイ・ルスにやってくる人をターゲットとしたアパートが立ち始めていることからもうかがえる。このため、住民は立ち退きの不安を抱えている。

3-5 生活の中の水(井上千里・高藤薫)

今日、不衛生な水を飲んだことで発生する下痢で、多くの子供たちが命を落としている。その数は世界中で1日5000人、年間で180万人を超えるといわれている。生活用水・飲用水の環境を整えることが、いかに多くの命を救うことに繋がるかがわかる。

フィリピンのスラムにおいても、状況は厳しいものであることから、私たちはバランガイ・ルスでの調査テーマを「生活における水」とした。特に、スラムでの水道の供給や排水のシステムが具体的にどうなっているのかを知りたいと思ったからである。

まず、バランガイ・ルスの生活で使われている水道システムを具体的に紹介していく。

- 1 数軒で共用する水道
- 2 各自の住宅に引いてある水道

1は共用のものであり、2は個人所有である。共用水道のシステムは、共用の水道小屋

にバケツを持っていき、そのサイズに応じてお金を払い、水を得るというもので、小さなバケツで 1 ペソを支払っていた。この他にもポンプ式の供給システムがあったり、地下から水をくみ上げて貯める大きなタンク付きの供給システムを持つ家があったりする。彼らは近所の人々に水を 1 杯 1 ペソで売って、利益を上げていた。大量の水を使う大家族にとっては、このような形で購入する生活用水の代金が大きな負担になっている。私達が訪問した 10 人の子供がいる家庭では、水の使用料に月 900 ペソをかけていて、これは収入の 5 分の 1 に相当するそうだ。

次に、2 の水道システムが家の中にある 3 世帯の様子を報告していく。1 軒目は 2 人家族で、収入は 3000 ペソ。水道代には月 200 ペソを使っている。キッチンの水道だけを使う時と、シャワーとキッチンを同時に使う時では、水量をバルブで調節して使い分けていた。そうしないと水道管が壊れてしまうそうだ。2 軒目は 6 人家族で、収入は 6700 ペソ、こちらの水道代も 200 ペソ使っていた。「水道水は消毒が強く、プールの水を飲んでいるのと同じだ」とのことで、この家には大きなミネラル・ウォーターのボトルがあった。3 軒目も 6 人家族だが、収入は 18000 ペソと飛びぬけていた。その収入は日本で働いている子どもの仕送りということだった。水道代には月 300 ペソ使っている。これで見ると、共用よりも水道を家に引いている個人の方が、料金は割安であるということが分かる。しかし、2 の水道システムを個人の家に取り付けるには、4000~7000 ペソ、米ドルに換算して 100 ドル前後かかる。貧困世帯の平均月収は 5000 ペソ以下だから、接続費用が払えず、今でも共用の水道システムを利用する人の方が多いようだ。

水にかかるお金はこれだけではない。これに加えて 90 年代から、スラムでもミネラル・ウォーターをサリサリと呼ばれる地元の雑貨店で購入して、飲む人が出てきている（ただし、「おいしいが高い」ミネラル・ウォーターの購入量は、収入に左右される）。さらに私たちは道を歩いていて、水の自動販売機を見つけた。小さなビニール袋を蛇口に取り付け、1 ペソを入れると冷たくて安全な飲み水が出てくるという仕組みである（ミネラル・ウォーターではないようだった）。コストは別にして、ほとんどの家が生活用水や飲料水の「質」に満足していた。昔に比べて、飲み水や水道水の供給システムは、大きく改善されたと人々



洗濯している女性

は言っていた。数年前までは、安全性の低い水により腹痛や下痢などが原因となって亡くなる人が多かったそうだ。実際に 2003 年 10 月にはコレラが大流行し、7 人が死亡、600 人以上が感染している。しかし今では水が原因で大きな病気になる人はいなくなり、水の安全性は水道が整備されたおかげでだいぶ高まった。

一方、排水には問題が多そうであった。家庭で使われた水は、すべて道路の脇にある小さな溝（下水道）に流されていて、非常に不衛生だった。中

には家の下を流れているところもあり、「排水が家の中にあふれ出てしまった」という話も聞いた。私たちにとっては驚くべきことだが、水道管は地面に埋まっておらず、むき出しになっている。下水道と密接している箇所もあり、衛生にはよくない。

水の供給システムに関してはだいぶよくなったとはいえ、排水システムは、昔と比べてもあまり変わっていないようであった。人々の健康に少なからず悪影響を与えているので、水道管がむき出しになっている点などは早急な改善が必要だと思った。

3-6 女性組織の活動 (植竹聡美・金子華英)



インタビューに応じてくれた女性たち 　　私たちはフィリピン大学セブ校で、フィリピンでも有数の女性団体のリーダーであるテレサ・フェルナンデスさんから、ジェンダー問題についての講義を受けた。ジェンダーとは「社会的に作られる男らしさ、女らしさ」であり、幼い頃から自然と養われていくものである。昔からある「男は度胸、女は愛嬌」という言葉や、「男の子は泣くな」、「髪の毛が長いことや、スカートをはくことは女の子らしい」といった考え方に表れている。ジェンダーは歴史や文化、社会環境によって変化していくものであり、時に性差別・家庭内暴力や雇用格差につながる問題でもある。私たちは、講義で語られた内容の中でも、特に家庭内暴力について関心を持った。

家庭内暴力は昔から存在していたが、1995年に北京で開催された「第四回世界女性会議」によって世界的に認識されるようになった (バビオー 1996, p. 243)。一言で暴力と言っても、「蹴る」「殴る」「床に叩きつける」「物を投げる」など様々で、言葉によるものも精神的な暴力になる。そして、その原因もまた様々である。男性から女性に対する暴力は、社会の中で支配的な地位を確保し、維持し続けようとする欲求の表われであったり (バビオー 1996 p. 145)、貧困や人種差別などの社会的要素も一つの原因であると言われている (ナンシー 1995 p. 300)。

世界各地で、家庭内暴力の改善や女性の地位向上を目指した政府や市民による組織が数多く形成されている。フィリピンでは、大統領令に基づいて「フィリピン女性役割委員会」(National Commission on the Role of Filipino Women. <http://www.ncrfw.gov.ph/>) が1975年という早い時期に設置されている。その背景には、女性NGOの地道なロビー活動があると言われている。とりわけ、アキノ政権成立以降は、同委員会と女性NGOの間では、人的交流を含めた関係が維持されている (森谷 2004 p. 153-154)。

コミュニティ・レベルでの活動も盛んである。調査地バランガイ・ルスでは、「バンタイ・バナイ」、「メガナム」、「カリピ」といったNGO/住民組織が存在している。私たちは、フィリピンでの家庭内暴力の現状と解決に向けての取り組みについて調査を行うこととし、

「バンタイ・バナイ」(家族やコミュニティを見守るという意味)のメンバーから話を聞いた。この団体はメンバー全員が女性によって構成され、夫から暴力を受けている女性を助ける活動を行っている。暴力を受け、助けを求めてきた女性のカウンセリングを行ったり、夫を妻に近づけさせないよう誓約書を書かせたりすることもある。その存在が住民に広く知られていることから、バンタイ・バナイは地域の女性たちが安心して駆け込める、いわば避難所になっている。多くの女性がバンタイ・バナイに助けを求めており、暴力をみつけた住民も率先して子の団体に報告している。地域住民との強い結びつきをもつNGOである。また女性の自立支援として、職に就くために必要な技術を身につけさせたり、定期的にミーティングを行ったりしている。このような活動は、社会的立場が弱く発言する機会の少ない女性が、家庭内暴力の問題を表に出す手助けとなっている。

私たちは、実際に8人の女性にインタビューをした。アイーダさん(41才)は夫からの日常的な暴力と貧しさに苦しみ、バンタイ・バナイに助けを求めた。その結果、別居するための契約手続きをとることができた(フィリピン人の多くはカトリックのため、離婚が認められていない)。さらに、バンタイ・バナイは月々8000ペソの援助を彼女に与えている。彼女は、その活動に感謝し満足していると答えていた。

グロリアさん(50才)は夫の暴力から逃れるため、家族と別居している。夫は溺愛する息子だけに養育費を費やし、その他の子供の養育費はグロリアさんの姉が援助している。グロリアさんは化粧品販売の仕事に就いているが、収入はわずかで団体から月々2000ペソの支援を受けている。アイーダさん同様、彼女もこの団体に感謝していると言っていた。

援助金を給付し続けるだけでは、彼女たちの自立を妨げ、バンタイ・バナイへの依存をもたらすとも考えられる。援助から、職業訓練、そして彼女たちが自力で生活できるまでの流れがどのようになっているのか知りたかったが、フィールドワークではそこまでは調べるができなかった。

調査を終えて、スラムにおける家庭内暴力の原因も見えてきた。まず、ドラッグや酒に溺れた夫が生活費を出さず、妻と口論になるケースがある。仕事に就けない夫がストレスから妻と喧嘩をする場合もあるようだ。貧しさが家庭内暴力につながるが多く、問題の抜本的な解決のためには貧困の克服が不可欠だが、バンタイ・バナイもそこまで踏み込んで解決を探っているわけではないようだ。しかし、女性自身によるポジティブな活動は、被害を受けている女性たちに希望をもたらしており、非常に意味のある活動だと評価できる。

3-7 コミュニティ開発の中のフェアトレード(江口麻衣子・ボズ ラズ パウデル)

フェアトレードとは、経済的に厳しい状況にある生産者に適正な賃金を払うことで、その生活向上を支援していく活動である(藤原 2007)。

今回の研修中に、私たちはセブでフェアトレードに関わる3つの団体について調査した。

1 南のパートナー(Southern Partners And Fair Trade Corporation)

2 バランガイ・ルス多目的生活協同組合 (Barangay Luz Homeowners Multi-Purpose Cooperative)

3 メガママ (Mega Moms Multi-Purpose Cooperative)

「南のパートナー」は1996年2月に設立されたフェアトレード団体である。セブ市内で23、隣の島のボホールで4、ネグロスで2団体と共同活動をしている。セブ市に店を持っていて、ドライマンゴー、ココナツオイル、コーヒーなど、さまざまな商品を買っている。ドライマンゴーが主たる商品であり、農家から適正な価格でマンゴーを買い取り、それをドライマンゴーやマンゴーピューレに加工し、販売している。商品の80%は海外に輸出され、残りの20%は現地で売られている。輸出先はイタリア、ドイツや香港などで、日本では神戸大学の学生たちが立ち上げたNGO「ペパップ」が輸入販売に携わっている。私たちが訪問したときも、神戸大学の学生の岩下さんがインターンとしてお店で働いていた。



メガママのメンバーたち

次の2つは、研修に参加した学生全員で調査をおこなったバランガイ・ルスの住民組織である。

コミュニティ開発の一環として、女性たちが経済力をつけようと活動している。

多目的生活協同組合は、1998年に設立された。リーダーのニーダ・カブレラさんは、スラムの住民組織のリーダーとしてフィリピンでも有名な女性である。この団体では、毎日大量に飲まれているジュースのパックから買い物バッグを作っている。大量に出るごみのリサイクルと女性の収入向上が1つになったユニークな活動である。収集・洗浄したジュースパックから、注文に応じたデザインやサイズのバッグを作っている。バッグ以外にも、ジュースパックを使ってエプロンやスリッパなど30~40種類の商品を、主にヨーロッパから注文を受けて作っている。

メガママも、やはりバランガイ・ルスの母親たちが立ち上げた2006年設立の新しい組織である。地元のカトリック団体の支援を受けており、店舗兼オフィスは、その敷地内にある。ある貿易会社から無料でもらった貝殻、木材、そしてナイロンから、ネックレスやブレスレットなどのアクセサリーを作っている。まだ販売先の開拓が進んでおらず、司祭さんたちが海外に出張したときに、出先の教会でこれらの商品を買っているとのことであった。フェアトレードのほかにも、メガママは49名のメンバーの収入向上のために、ケータリング・サービス（パーティーや結婚式の料理）、クリーニング、雑貨販売といったビジネスも行っている。利益の一部を、子供たちの教育のために奨学金にも回している。さまざまな研修やセミナーなどにも積極的に参加している。

2週間という短い間だったが、自分たちのコミュニティを改善していこうとする3つの団体を訪問し、商品をじっくり観察しながら、生産者から直接話を聞かせてもらうことが

できた。セブでのフェアトレード活動はまだまだ新しい試みであることがわかったが、農村部でも都市スラムでも、住民たち自身が地道な活動に取り組んでいる。とりわけ関わっている多くの女性たちが活発的で、地域で大きな役割を果たしていることがわかった。何よりも、スラムの貧しい女性たちが自分たちで仕事を作り出し、収入を向上させ、その結果として、自信を持つようになったことはすばらしいと思う。

帰国後、研修に参加した子島ゼミの3年生は、上記の団体から買い付けた品物を、研修には参加しなかったゼミ生やボランティアたちと一緒に学園祭で販売した。

3-8 「参加型」コミュニティ開発—学園祭での取り組み（伊藤裕輔・山本路子）

東洋大学板倉キャンパスでの2008年学園祭は11月1、2日に行われ、多くの人でにぎわった。子島ゼミはキャンパス内の大食堂に「フェアトレード本舗」を出し、ゼミ生とボランティア学生の数人で販売にあたった。今回は、「学んだことを実践につなげる」ことを



学園祭での販売

意識して、夏休みに研修で訪れたセブ島中心の商品構成とし、生産者のコミュニティや団体に関するポスターをあわせて展示した。つまり、スラム住民が参加するコミュニティ開発に、私たち自身も「参加」しようという試みであった。

研修報告としては、参加学生が分担してバランガイ・ルス、生産者団体、メンバーの生活、住居、水、ジェンダーに関する説明文や写真を展示した。研修中に仕入れた商品は二つあり、どちらも調査したバランガイ・ルスの女性たちが

作っているものである。「多目的生活協同組合」のジュースパックで作ったリサイクル・バッグは、バッグ自体が軽いにもかかわらず、女性たちが一つ一つ丁寧に作っているので意外と丈夫である。今回は、あくまで商品を知ってもらうことを目的とし、経費や利益を乗せず1個300円とした（インターネット上では、1000円前後で販売されている）。価格の安さもあってか、男女や年齢の別なく60個売ることができた。

「メガマム」はできて1年という新しい団体である。ここからはネックレスを32個仕入れた。一部は、お客さま自らに作っていただくとうまく仕上がらなかったが、うまく話しかけていない部分があったためか、ビーズの穴に紐が通らないものがあり、作れなかった（ただ、自分たちで作業をやってみると、バランガイ・ルスの女性たちが大変な作業をしていることが身にしみてわかった）。フィリピンの女性の苦労をお客さまに伝えることで、完成品の19個を売ることができた。これに加えて、やはり研修時に訪問した「南のパートナー」のドライマンゴーも販売した。このドライマンゴーは、神戸大学の学生さんたちが立ち上げた「ペパップ」というNGOが輸入販売している。30個仕入れたが、試食も好評で完売した（ペパップのHPから購入可能）。

まだまだ改善すべき点は多くあるが、NGOやフェアトレード団体からの委託ではなく、実際に現地で購入し、生産者の様子を伝えるという試みは、子島ゼミ初の試みであり、その点でも前進があった。

3-9 ボホール観光（小尾直美・中川知美）

本節では、講義と調査の合間に訪れたボホール島の観光について述べることにする。ボホール島はビサヤ諸島のほぼ中ほど、セブ本島とレイテ島に挟まれるようにして浮かぶ島である。私たちは、休日を使って一泊二日でボホール島へ小旅行に行った。

セブ島からは、高速船 Super Cat に乗って、2時間ほどでボホール島へ着く。船のターミナルでは、空港のシステムと似ていて、荷物チェックなどが厳重に行われていた。2階に上がると、チェックインカウンターがあり、ここで指定席の番号を受け取る。基本的に出発30分前には、チェックインを済ませる必要がある。ターミナルにはお土産を買えるお店がいくつかあり、お菓子などを購入し、船の中で食べた。また、船内では映画鑑賞することができた。

ボホール島の見所としては、島の中央部にある「チョコレート・ヒル」、世界最小の猿といわれる「ターシャ」、フィリピン最古級の教会「バクラヨン教会」、ロアイ川の川下り等が有名である。私たちは、実際にこれらの場所を訪れてきた。

ボホール島に着いて、最初にバクラヨン教会を訪れた。バクラヨン教会は、マニラのサンオウガスチン教会、セブのサント・ニーニョ教会とともに、1595年に建てられたフィリピン最古級の教会である。教会の2階には博物館（入場料25ペソ）も併設されている。そこには、スペイン統治時代の貴重な聖典や聖母マリアやキリストの像など宗教的な貴重品が展示されている。これらを通して、この教会の歴史の深さを感じた。

フィリピン国民の85%がカトリック教徒であり、たくさんの教会が存在する。1521年、マゼラン遠征隊がセブ島へ来航し、その際にスペイン人の修道士がセブの住民800名に洗礼を施し、カトリックに集団改宗させたという。その後、植民地化と布教とは一体となって行われた（寺田・森 1995 p.106）。

教会の次に、私たちはロアイ川での川くだりに向かった。一時間のクルーズを楽しみながらの昼食である。のんびりと木々に包まれた川をゆっくりすすみながら食べた魚やフルーツは素敵だった。buffet形式で好きなものを好きなだけ食べることができたのでとても満足した。飲み物を注文すると、ビンにストローをいれて提供してくれる。

クルーズの途中で、先住民の村を訪ね、船からおりて村の中を散策した。民族衣装に身を包んだ人々が、タイコの演奏をし、かろやかなダンスを披露して迎えてくれた。私たちも帽子をかぶらせてもらったり、一緒に楽器を演奏したり、的を狙って弓矢を飛ばしたりした。火の輪をくぐるパフォーマンスが一番魅力的だった。彼らは、観光客のチップを足しにして生活をしているそうである。

クルーズの間中、「専属歌手」のおじさんがずっと歌を歌ってくれた。外国人観光客が多

いので、タガログ語のほか英語、日本語、そして韓国語でいろいろな歌を熱唱してくれた。雨が降り出すと、「雨を見たかい」を歌いだすなどサービス満点だった。

その次に訪れたのが、チョコレート・ヒルである。このボホール最大の見所は島のほぼ中央にある。高さ 30~40 メートルの円錐形の小丘が約 1000 個、それが延々と続く独特の景観である。4月から6月の乾季に、丘の色がみどりからブラウンに変色することから、この名がつけられたという。全部で 214 段ある展望台への階段をのぼりきると、そこからチョコレート・ヒルを一望することができる。同じ形の丘が 360 度見渡す限り広がっている光景にとっても感動した。

最後にターシャを訪れた。ターシャは、世界最小のメガネザルとして有名で、大人のオスでも体長 20~30 センチ、体重 120 グラムほどの大きさにしかない。手や肩にターシャを乗せると、その小ささを実感できる。肩や手に乗せたままターシャと一緒に写真を撮ることができたが、光に弱いそうなので、フラッシュ撮影は厳禁とのことであった。

ボホール島は、美しい海でダイビングが楽しめる場所としても有名である。今回泊まったホテルの前の浜辺では、他の観光客を見かけることもなく、プライベートビーチ感覚で、きれいな海を満喫することができた。

最後は、フィリピン大学セブ校の学生と東洋大生の交流についての紹介である。

3-10 学生間の交流 (横尾真純・Maria Armie Sheila B. Garde)

私は、フィリピン大学セブ校の学生さんたちとの交流について紹介したいと思う。学生さんたちは、空港に着いたばかりで、周囲の状況も分からず戸惑っていた私たちを温かく笑顔で迎え、バナナの葉で作った帽子をプレゼントしてくれた。移動中のバスの中でも絶えず話しかけてくれたので、すぐに打ち解けることができた。



UPセブの学生たち

学生さんたちはボランティアとして、いつも私たちの近くにおいて、積極的に交流を求めてくれた。私たちが何を言いたいのか理解しようと、とても熱心だった。日本に興味を持っている学生さんが多く、英語の文章と一緒に日本語に訳しながら、交流を深めた。セブの市内観光の際も、訪れた場所の歴史的背景や、展示品の詳細を丁寧に教えてくれた。

バランガイ・ルスでのフィールドワークでも、住民の声を私たちに伝える重要な役割を担い、私たちが聞きたい情報をしっかりと聞き取ってくれた。最後のプレゼンテーションの準備でも、英語の文法や表現についてアドバイスしてくれた。おかげで、すべてのグループが無事にプレゼンテーションを完成させ、発表することができた。

私がとくに仲良くなった二人を紹介したいと思う。まず、チャールズは、少し恥ずかしがり屋だが、いつも楽しそうに私たちに話しかけてくれて、笑わせてくれた。彼は日本語

の勉強をしていて、時々話の内容がわかると「今のわかりました」と嬉しそうに言っていた。次に、アーミーは、講義の前やフィールドワークの際に、私たちのためにさまざまな準備をしてくれた。常に私たちの行動を見守り、サポートしてくれた。帰国後は、一番頻繁にメールのやりとりをしている。

私たちがセブで過ごした二週間は、彼らのおかげでとても充実したものになった。日本に帰るときは非常に辛かったが、再会を約束して、笑顔で別れた。学生さんたちと過ごした日々を忘れず、これからも交流を続けていきたいと思っている（横尾）。

「たくさんのごことを得られるからよ」マフィン、彼女がなぜボランティアをするのか聞かれると、こう答えた。08年9月に3度目を迎えたこのフィリピン大学セブ校と東洋大学のワークショップには、たくさんの方のフィリピン人学生がボランティアとして参加した。彼女もその1人だが、ボランティアのほとんどは、前2回のワークショップにもボランティアとして参加している。前回と同様に、今年も文化交流と新しい友達ができることを楽しみに参加したのである。

東洋大学の19名は、コミュニティ開発と都市貧困について学ぶため、セブ市を訪れた。私たちは、一緒に歴史遺産やボホール島の観光地を訪れ、バランガイ・ルスでの調査やプレゼンテーションの準備もした。「2週間という短い間だけれど、日本の学生たちは驚くほど、私たちフィリピン人と考え方が同じなの。だから、一緒に頑張りましょう。」とマフィンは言っていた。

講義やコミュニティでの活動の合間、私たちは東洋大学の学生たちと学校、家族、好きなものについて話をしたり、一緒にゲームをしたり、冗談を言い合ったり、時には子島准教授も一緒になって「バナナダンス」をしたりして過ごした。私たちはセブアノ語を教え、彼らは私たちに日本語を教えてくれた。一緒にショッピングモールに行ったり、ビデオケ（カラオケ）に行ったり、夕食を食べたりもした。

「言葉の壁はあるけれど、なんとかやっていけるわ」フィオナは言った。私もそう思った。東洋大学の学生たちはフレンドリーで、よく話した。自分の気持ちを英語で表現するのが難しいと感じていた学生もいたようだが、私たちとコミュニケーションを図ろうと努力していた。彼らと時間を共有することで、授業や課題提出などに支障もあったが、それでも私たちはとても楽しく過ごせた。東洋大学の学生たちだけでなく、今まで知らなかったセブ校の学生とも、ボランティアを通して友達になることができた。

「もちろん、私は来年も、卒業しても、たとえ困難があっても、またボランティアとして参加するわ。だってこのワークショップから、いつも私はたくさんのごことを得られるから」ジョイ・エバも楽しそうに言っている。

東洋大学の学生たちと一緒に過ごして、日本文化についても多くのことを学ぶことができた。いつか日本を観光したり、東洋大学を訪れたりすることを楽しみにしている（アーミー／横尾訳）。

English Summary

Community Development (Chapter 1) by Ayana Katsumata and Masumi Yokoo

Community Development is the common theme for study courses in Thailand and the Philippines. According to *Community Development: Breaking the cycle of poverty* (Swanepoel and De Beer 2006), Community Development has four features; collective action, need orientation, objective orientation, and action at grass roots level. Many projects have failed without fulfilling these requirements. In Cebu, Bangkok, and Ayutthaya, we observed excellent models of Community Development. For example, many women take part in the activities of Bantay Banay (Community Watch) to solve gender issue such as domestic violence in Cebu. In this report, many such activities are shown to illustrate how Community Development works among the urban poor in Southeast Asian cities.

Lectures at UP Cebu by Mayumi Usami and Shiori Tetsuka

At UP Cebu, we had nine lectures from various lecturers. It was about poverty, urban development and gender so on.. Lecturers are not only from the university, but also from local NGOs and Cebu city administration. They gave us special lectures with useful data to understand the poverty and development in the city. After each lecture, we asked questions about the issues.

Barangay Luz by Miki Koroki and Nanae Wakabayashi

Barangay Luz is one of the 80 barangays in Cebu city. Originally it was a temporary shelter for the victims of the 1956 fire. Since then, people came from here and there, and it has grown as one of the biggest squatter areas in the city. Today, 15,000 people live in 20 square km of Barangay Luz. There are 16 sitios (wards) in the barangay, and the sitio names are from the original places where people used to live. Barangay Luz has become the model of “Community Development” in Cebu. People living there have started various activities of Community Development.

Housing by Ayana Katsumata and Misa Kujirai

We visited 16 houses in Barangay Luz. Surprisingly, they own many kinds of electrical appliances in almost all the houses. We recognized how we were prejudiced by the terms such as “slum” and “squatter”. We were also impressed with the “prayer room” which demonstrates the vitality of the Christian religion. As far as the right of residence is concerned, the “93-1 program” was not successful, and has caused troubles between some people in Barangay Luz and the provincial government. There is also a visible gap between ‘rich’ and ‘poor’ residents in Barangay Luz. It will widen in the future. Some people have become the owners of rental houses which provide living space for those working at Ayala Shopping Complex and Water Front Hotel.

Water in life by Chisato Inoue and Kaoru Takato

Through the lectures at UP Cebu, we learnt the importance of water in life. We decided to study about the water system in Barangay Luz. There are two different systems, common and private water

in Barangay Luz. The private water system can be installed within the house, making life more convenient. However, it costs Php 7000, and is too expensive for most of the residents. Therefore, many people use common water. Still, they are satisfied with the safety of the water, saying that it has been improved in the last ten years. On the contrary, the drainage system has many problems, causing insanitary conditions in Barangay Luz. Sometimes, the drainage causes floods in people's homes.

Activities of Women's Organizations by Satomi Uetake and Hanae Kaneko

Attending the the lecture by Teresita Fernandez, Executive Director of Lihok Pilipina, we were interested with the gender issue. Therefore, we decided to do field research on women's organizations working to improve women's present situation. We interviewed with members of Bantay Banay (Community Watch) as well as women suffering from domestic violence. Bantay Banay supports those women by counseling, giving cash aid and offering job opportunity. In this way, Bantay Banay brings hope to the women. We could understand the causes of domestic violence within Barangay Luz through the interviews. We found it is quite often that poverty causes domestic violence. Alleviation of poverty is essential to solve the problem of domestic violence.

Fairtrade in Community Development by Maiko Eguchi and Boz Raj Paudel

We visited three fair trade organizations in Cebu city; Southern Partners And Fair Trade Corporation, Barangay Luz Homeowners Multi-Purpose Cooperative, and Mega Moms Multi-Purpose Cooperative. The Multi-Purpose Cooperatives are located in Barangay Luz, and women are engaged with the activities of income generation. It was quite interesting to observe how Community Development and fairtrade were related.

Bohol Trip by Naomi Obi and Tomomi Nakagawa

We went to sightseeing in Bohol island with Philippine friends. We visited river, church, and the Chocolate Hills. It was a valuable experience and we were able to have a glimpse of unique culture of the island. The beach in front of the hotel was very beautiful as well, and we were satisfied with the sightseeing in Bohol.

Friendship between Toyo and UP students by Masumi Yokoo and Maria Armie Sheila B. Garde

Chapter 9 is about cultural exchanges between TOYO and UP students. UP students were always with Toyo students through lectures, fieldwork, and sight seeing. Therefore, all the Toyo students were very happy to be with them. UP students, on the other hand, enjoyed the workshop as volunteers. They could understand Japanese culture through the words and deeds of Japanese students. Yokoo Masumi, on behalf of the Toyo students, says "Daghang Salamat" to the UP professors and student volunteers.

第 I I 部 チュラロンコン大学

第 4 章 スケジュールと参加メンバー

4-1 スケジュール (伊藤智史)

Day 1: Sunday 31st August 2008

Arrival Bangkok Flight TG677 at 21:25 hrs. and Chulalongkon University : Pick up students by Ajam Boonyong and Khun Joy

Day 2: Monday 1st September Chulalongkon Alimni Coference, Kasamwuttayanan Building, Faculty of Political Science

09.00-10.30	: Opening Session
M.C	: Dr. Boonyong Chunsuvimol, Department of Sociology and Anthropology, Faculty of Political Science, Workshop Coordinator, Chulalongkon University
Greetings	: Dr. Akiya Kimihiro from Toyo University
Welcome Speech	: Prof. Charas Suwanmada, Dean, Faculty of Political Science Chulalongkon University
Closing Remark	: Dr. Boonyong Chunsuvimol
	: Photo Session in Conference Room
10.30-10.45	: Coffee Break
10.45-11.00	: Introduction of Chulalongkon University by Video
11.00-11.30	: Introduction of the Workshop Activities, Overview of the Program by Ms. Anisara Pensuk (Joy)
11.30-12.00	: Self Introduction by Toyo Participants and Chulalongkon Students
12.00-13.00	: Lunch at Cafeteria
13.00-14.00	: Chulalongkon University Campus Tour
14.00-14.15	: Coffee Break
14.15-15.15	: Communication Exercise: Interview CU Students
15.15-16.15	: Reporting Communication Exercise
18.00-21.00	: Welcome Dinner at SASA Restaurant

Day 3: Tuesday 2nd September: Visiting NGOs

09.00	: Leave CU
10.00-12.00	: Visit Duang Prateep Foundation and Klong Toey Slum

Community

12.00–13.30 : Self-Lunch at LOTUS Rama 4

14.00–15.00 : Long-Tail Boat Trip Sight-seeing Canal Settlement Along
the Chaopraya River

16.00 : Arrive at CU

Day 4: Wednesday 3rd September: Visiting Community and Alumni Conference

08.00 : Leave CU

08.30– 9.30 : Visit Suan Plu Community

10.00–11.30 : Lecture on CODI

12.00–13.00 : Self-Lunch at CU Cafeteria

13.00–14.00 : Lecture on Thailand History and Culture by Asst. Prof.
Pavika Sriratanaban (Ph.D), Head of the Department of
Sociology and Anthropology, Faculty of Political Science,
Chulalongkon University

14.00–14.30 : Coffee Break

14.30–15.30 : Lecture on Urban Planning in Bangkok by Asst. Prof.
Napanat Tapananont (Ph.D), Department of Urban and
Regional Planning, Faculty of Architecture, Chulalongkon
University

Day 5: Thursday 4th September: CU Alumni Conference

09.00–10.00 : Lecture on Field Survey Methods by Dr. Akiya Kimihiro,
Toyo University

10.00–10.30 : Coffee Break

10.30–11.00 : Preparation for Field Survey

12.00–13.00 : Self-Lunch at CU Cafeteria

13.00–16.00 : Preparation for Field Survey (continued)

Day 6: Friday 5th September: Field Survey

08.30 : Leave CU

09.00–10.30 : Visit Suan Plu Community

10.30–12.00 : Data Collection within Community

12.00–13.00 : Self-Lunch

13.00–16.00 : Data Collection within Community (continue)

16.30 : Arrive CU

Day 7: Saturday 6th September

- 09.00 : Check Out and Leave CU to Ayutthaya
- 11.00 : Arrive Ayutthaya and Check in at Ayutthaya Hotel
- 11.00–12.00 : Sight-Seeing in Ayutthaya with Van
- : Self-Lunch and Free Afternoon

Day 8: Sunday 7th September: Rajaphat University, Ayutthaya and Field Visit

- 09.00 : Leave Ayutthaya Hotel to Rajaphat University (RU)
- 09.30–10.30 : Lecture on Community Network in Ayutthaya By Ajarn Sutham
- 10.30–11.00 : Coffee Break
- 11.00–12.00 : Field Survey Preparation
- 12.00–13.00 : Self-Lunch at RU Cafeteria
- 13.00–16.00 : Visit Study Area with Ajarn Sutham

Day 9: Monday 8th September Whole Day Field Survey

- 09.00 : Leave Ayutthaya Hotel
- 09.30–12.00 : Visit Akhan Songkror Community
- 12.00–13.00 : Self-Lunch
- 13.00–16.00 : Visit Farmers Village in Ayutthaya

Day 10: Tuesday 9th September: Whole Day Field Survey

- 08.00 : Leave Ayutthaya Hotel
- 09.00–16.00 : Community Visit

Day 11: Wednesday 10th September: CU Alumni Conference

- 08.00 : Check Out from Ayutthaya Hotel
- 10.00 : Check in at CU
- : Self-Lunch and Free Afternoon

Day 12: Thursday 11th September: CU Alumni Conference

- 09.00–10.00 : Preparation for Presentation
- 10.00–10.30 : Coffee Break
- 10.30–12.00 : Preparation for Presentation
- 12.00–13.00 : Self-Lunch at CU Cafeteria
- 13.00–15.00 : Coffee Break
- 15.00–18.00 : Preparation for Field Survey

Day 13: Friday 12th September: CU Alumni Conference

09.00 : Group Presentation
10.00-10.30 : Coffee Break
10.30-11.30 : Group Presentation (Continue)
11.30-12.00 : Closing Ceremony

Day 14: Saturday 13th September

: Check Out from Chulalongkorn University
: Leave CU to Suwannaphum Airport
Departure Time 07:35 hrs, Flight TG676

4-2 参加者リスト

引率教員：秋谷公博。

国際地域学科：伊藤智史、猪子景子、川久保剛、菊地志織、佐藤賢子、塩野優、清水皓太、菅谷江里（2年）。

国際観光学科：鶴岡舞（3年）、栗野厚基（1年）。



写真Ⅱ-1：参加者メンバー

第5章 タイ王国の概要 (佐藤賢子)

タイは、タイ族による初の王朝であるスコータイ王朝から、現在のチャクリー王朝に至るまで、東南アジアの中で唯一他国の支配を受けずに独自の発展を遂げて来た王国である。

インドシナ半島のほぼ中央に位置し、ミャンマー、ラオス、カンボジア、マレーシアと国境を接する。国土面積は51万3115 km² (日本の約1.4倍)、中部平野地域、東部海岸地域、東北部高原地域、北部及び西部山岳地帯、南部半島の5地域に区分される。国土の40%は農地である (在京タイ王国大使館ホームページ)。熱帯モンスーン気候に属し、暑季 (3月～5月)、雨季 (6月～10月)、寒季 (11月～2月) の3つに分けられる。

人口は約6575万人 (2007年現在)。人口密度は1 km²あたり128人である。人口増加率は0.6%とわずかながら増加している (アジア開発銀行ホームページ)。タイ族85%、華人系10%、その他様々な民族で構成される多民族国家である。上座部仏教が国教であり、国民の95%以上が仏教徒である。プミポン・アドゥンヤデート国王陛下は仏教の擁護者である (小野澤 1994 p. 27)。憲法により信仰の自由が保障されており、イスラーム教・キリスト教・ヒンドゥー教・シーク教、さらに山岳民族固有の宗教を信仰する者もいる。

学校制度は、日本と同じ6・3・3・4制である。このうち、義務教育は初等教育 (小学生) 6年間と前期中等教育 (中学生) 3年間である。就学率は、2008年の外務省の諸外国の学校情報のデータによれば、初等教育100%、前期中等教育92.5%。中学校では学校に通うことができない子どもも見られる。後期中等教育 (高校生) は63.8%、高等教育 (大学生) は57.1%であり、在学率は年々上昇している (外務省ホームページ諸外国の学校情報のデータ)。

GDPは2007年時点で847兆バーツ、経済成長率は4.8%である (在タイ日本国大使館ホームページ)。農業は就業者の約40%強を占めるが、GDP (2007年現在) の割合は11%である。製造業の就業者は15%であるが、GDPの約35%、輸出額1,512億ドルの約85%を占めている。主にコンピュータ、自動車・部品、集積回路、天然ゴムを輸出する。近年では、工業や繊維、食品産業に加えて機械工業などの重化学工業やハイテク産業が伸びている。2000年初頭から経済成長を続けてきたタイだが、鳥インフルエンザの影響や、石油価格の高騰、津波被害の影響、政局不安などにより近年では経済成長が鈍化している。

第6章 講義の概要

6-1 タイの文化について（伊藤智史）

本稿はパビカ・スリタナバン教授の文化に関する講義をまとめ、加筆したものである。

文化という概念は、18世紀から19世紀初めにヨーロッパで生まれた。この頃の文化は、ヨーロッパが中心となっている社会の中でヨーロッパの権力と世界中の植民地との関係を表している。また、博物館などの美術及びクラシック音楽などの活動について知識のある人や携わっている人は、文化をそれらの活動によって表現している。

文化は自分たちのアイデンティティを形作るものであり、また人間の営みなどに意義や重要性を与えている。社会学の用語としての「アイデンティティ」とは自己意識の統合性、一貫性、所属性をしめす概念であり、“自分がこういう自分である”という感覚や認識のことである。

社会の中で中心となっている文化は、伝統的な考えや価値などから成り立っている。社会にはサブカルチャーが存在する。サブカルチャーは文化の中でも中心的なものとなっており人々の行動を決定付ける。サブカルチャーとは民族やジェンダー、宗教、政治、職業などの組み合わせによって分類できると考えられる。文化は地理的な状況や貿易、移住、マスメディア、宗教、哲学などによって地域レベルまた世界レベルに広範囲に広がる。加えて、文化は家族や愛、親子関係などといった生活様式を決定付けるものでもある。少数民族も彼ら自身のアイデンティティを持っており、文化の一部を担っている。

文化には2つの一般的な考えが存在する。1つ目は「異なっている」ということである。異文化というのは、自分たちの国の文化（自文化）が存在することが前提となっている。つまり、自文化があることによって異文化の存在を明らかにしている。2つ目は「境界線」があるということである。私たちは自然と自分たちの文化と異なる文化を線引きしている。そうすることによって、自文化と異文化をより明確に区別している（丸山 2007 p.190）。

食事の仕方や公共の場所でのマナーも、文化によって非常に異なる。それらによって異文化理解にもつながる。つまり、自文化を大切にすると同時に、異文化を理解するという姿勢が文化を捉える上で非常に重要である。

6-2 バンコクの都市計画（川久保剛）

本稿は、ナパナット教授のバンコクの都市計画に関する講義をもとに加筆したものである。

近年、バンコクは交通網の強化された都市として発展している。しかし、以前は現在のように交通は整備されていなかった。かつてバンコクは水の都市であり、水運輸送が大半であった。チャオブラヤ川を利用することで、バンコクと北部までを結ぶ広域の輸送手段が主であった。しかし、河川の水位が1年を通じて変化し、乾季になると水位が下がるため、輸送が制限されることもあった。陸路が整備されていない地域では、雨季に通行で

きなくなることもしばしばであった。やがて、近代化により、バンコクから遠方のチェンマイなどへも鉄道が敷設され、大幅な時間の短縮を可能にした。チェンマイの農作物などが鉄道で運搬され、バンコクで販売されるようになり商業が活性化した。

次第にバンコクは、鉄道輸送と車輸送を主体とした都市へと変化した。交通網の発達は輸送の観点では様々なメリットをもたらしたが、交通渋滞の問題が深刻化した。それを受けて1975年の都市計画条例では、計画から政策、設計、管理まで、都市や関連地域、国レベルでの開発や整備、土地、伝達、輸送、出版サービス、環境を含めた“具体的な計画”として特定の地域の開発や整備などが盛り込まれた。さらに、2006年制定のバンコク大都市化基本計画では、大量輸送、整備、土地利用、空き地計画などが新たに盛り込まれている。

近年、地下鉄やスカイトレイン（BTS）が敷設され、またスワンナプーム国際空港も開港して、バンコクは鉄道都市及び空の玄関口として発展している。しかし、当初計画されていた7年計画の大量輸送計画は、予算や政治の問題などで未だ計画の30%ほどしか進行しておらず、完成にはあと20年かかる予測である。整備計画も重要な課題である。現在、密集地域の人口や首都機能を周辺地域に分散させる計画が実施されている。

ナパナット教授の講義を踏まえ、筆者（川久保）は、都市計画の中で、スラム地域を問題として排除するのではなく、行政とNGOとスラム住民が共同して取り組む政策が必要だと考える。都市問題を解決するには、遠藤（2005）が述べているように、住民組織、行政、NGOによる共同での取り組みや、それらのネットワーク形成が必要である。こうしたネットワーク構築には、当該住民が住民組織を形成し問題解決に取り組み、それを行政・NGOが支援することが重要である。住民の主体的な活動は、問題を考えていくプロセスの中で解決能力を習得していくことにつながり、ひいては取り組みが周辺地域へと波及すると考えられる。

6-3 アユタヤのコミュニティ開発（猪子景子）

本稿は、スーナムチャタシン教授のアユタヤのコミュニティ開発についての講義をまとめたものである。

アユタヤ王朝（1438年～1767年）はタイ族最古の王朝であるスコタイ朝（1220年～1438年）の次に興った。日本とは14世紀終わり頃から貿易を開始し、17世紀には日本人居留地が建てられるほどに親密な関係であった。ヨーロッパや中国とも外交を展開していた。1767年に隣国ビルマの攻撃を受け王朝は滅亡したが、市内には76の寺院など歴史的遺産が数多く残されている。その価値を評価され、1991年に世界遺産に指定されている。

アユタヤ市を含むタイ王国では、自然環境・人口・貧困・借金・エイズ・ドラッグなどの様々な問題に直面している。それらの問題を引き起こす最も主要な要因としては、人々の知識不足や認識不足が挙げられる。

これらの問題の背景には、1)郊外に大きなディスカウントストアが出来たことによって、

その周りの中小の零細企業の収益減少や倒産を引き起こしてしまうという資本主義による影響、2)利潤を追い求めることによって、富裕層は教育などお金を出して受けられるが貧困層は教育を受けることが出来ないことが原因となって貧困の悪循環に陥ってしまうなどの社会構造の変化による影響、など、様々な形で影響を及ぼしている。

複雑化する問題を解決するには、地域住民が自分たちの問題を認識し、それに対する取り組みを実施することで、問題を解決するための知識、能力、意識をいかにして向上させるかが課題となる。問題の認識から解決という一連の開発プロセスが重要である。これには、COD I が推進している貯蓄グループを核とした取り組みやコミュニティネットワーク組織（以下ネットワーク）によるコミュニティへの支援が効果的である。

COD I はアユタヤ市において住環境問題を抱えているワットピチャイコミュニティ、トロッカノムトゥワイコミュニティ、アーカンソークロッココミュニティなどの住環境改善事業を支援している。これらの事業を実施するに当たり、COD I は対象コミュニティにおける貯蓄グループの設立を支援している。その目的は、貯蓄活動を通して、各コミュニティが抱えている問題を認識させる、問題解決のための活動能力を向上させる、貯蓄の重要性認識させるなどである。貯蓄活動を核とした取り組みでは、各コミュニティが活動の経験や情報を共有しつつ、連帯して問題解決に取り組むネットワーク活動も重要となっている。アユタヤ市では、1998 年にCOD I が住環境改善への取り組みを実施していたアーカンソークックを支援するかたちでネットワークが設立され、2002 年に住環境整備事業を実施している。

COD I の支援のもと、アユタヤ市内では上記のコミュニティの他にも様々なコミュニティにおいて、貯蓄活動を核とした活動が行われている。貯蓄活動はコミュニティの人々に貯蓄の重要性を教えるだけでなく、自分たちが抱えている問題を認識させる上で必要である。COD I や行政、その他の支援組織などの支援を受けながら、コミュニティ活動に取り組むプロセスによって、様々な問題に対する能力を身につけることが出来るため、活動の核となっているからである。加えて、コミュニティ活動を支援するネットワークの役割も重要な役割を果たしている。ネットワークによるコミュニティへの支援活動における一連の構造的関係性は、地域全体の活動のボトムアップにつながるものと考えられる。

第7章 タイにおけるコミュニティ開発の支援組織

7-1 COD I (Community Organization Development Institute) (佐藤賢子)

タイでは、公共主導による公共住宅建設、サイトアンドサービスなどハード面を基調としたプラン重視の政府主導型開発が展開された。しかし、その効果が疑問視され、グラミン銀行及びCMPを取り入れられた。政府資金 12.5 億バーツによって、1992 年UCDO (Urban Community Development Office) が低所得者層の貯蓄グループを対象とした、いわば「統合型マイクロクレジット」によるソフト面を基調とした住民参加型開発が展開されることとなった。UCDOは2000年に制定された新たな法律のもとで、農村コミュニティの開発基金と合併してCOD Iに改組された。COD Iは公的機関とはいえ、独立した理事会をもつ。貯蓄グループやコミュニティ、さらにはコミュニティネットワーク組織を対象に、土地・住宅開発ローンや住宅改善ローンなどの資金の貸付や、各種の情報の提供などを行っている。COD Iの支援を受けた貯蓄グループは51県にまたがり、全国の都市貧困コミュニティの約半数に及ぶ1273のコミュニティで貯蓄グループの設立や600以上の貯蓄グループのネットワークの形成を支援している(高橋 2008 p. 30)。

2003年には、政府の施策として5年以内に200都市2000スラムコミュニティを対象として、安心して住むことの出来る居住環境を実現する「バーンマンコンプロジェクト」が打ち出された。COD I主導のもと2007年2月時点で、75県の214市・地方、773コミュニティ、4万5496世帯で実施され(下川 2007 p. 50)、都市貧困コミュニティの居住環境の改善に大きな成果をあげている。

7-2 ドゥアン・プラティーブ財団(塩野優)

ドゥアン・プラティーブ財団(以下プラティーブ財団)は、東南アジア最大級と呼ばれるクロントイスラムに本部を構え、住民の教育、健康管理、社会福祉、人材育成、防災に焦点を当てた活動を実施している。

プラティーブ財団は、1968年に設立された。当初は貧しくて学校に行くことのできない子や両親が働きに出てしまい面倒をみることのできない子を対象とした「1日1バーツ学校」という日本の寺子屋に近い活動を実施した。



写真Ⅱ-2： プラティーブ幼稚園

その活動が活発化するにつれて、スラムの立ち退き問題に対する取り組むようになる。しかし、スクオッター地区でのこうした取り組みの違法性を政府が指摘し、一時は住民の居住存続が危ぶまれた。同財団は居住権獲得を目的として住民と団結して、この課題に取り組んだ結果、クロントイスラムの多くの地区では、政府と土地の借用契約を締結

するに至っている。住民とNGO団体の結束により、10年の歳月を経て、居住権を獲得し「1日1パーツ学校」はバンコク都に移管され、公立の学校として「パタナ共同体小学校」へと発展したのである（秦 1993 p. 46）。

同財団の活動目的は4つの柱からなっている。

- 1) 「子供たちのおかれている状況に応じた対応していくこと」
- 2) 「地域開発で住民の意識の変化を促すこと」
- 3) 「生活向上によって職業選択の幅を広げる」
- 4) 「緊急災害時の救急活動」

1)として、同財団が経営する幼稚園でのプログラムや障害児童への教育サポートといったものがあげられる。幼稚園にはスラムに住む240人の子供が通っている。1日13パーツ、1年間で1000パーツ支払えば通うことができるシステムで年齢ごとにクラスが分けられており、3歳から6歳の児童がそれぞれクラスで授業を受けている。幼稚園には子供の安全を守り、教育を受けることができるという2つのメリットがある。驚いたのが年長のクラスがコンピュータの授業を行っていたことであった。

2)は、貯蓄グループなどの活動を通して、下水道や公衆衛生といった社会インフラを高めていくものである。

3)は、スラムの大部分の働き手がインフォーマル部門に従事し、収入が不安定な現状を是正する取り組みである。エイズや麻薬に対する正しい知識の教育と心のケア活動や、家庭の事情により学校教育を受けられなかった人々への再教育プログラムを推進している。

最後に4)であるが、スラムでは狭い空間にいくつもの家屋が密集しているため、ひとたび火災が起きると驚くほど速く火の手が回ってしまう。そこでNGOの職員と住民有志の消防団の結成している。このような取り組みが火災の未然防止、素早い消火活動を可能にしている。豊中市で使われていた消防車が寄付され、消防活動に多いに役立っている。

プラティープ財団ではグッズ販売も行っており、その売上がスラムの人々のための寄付金になっている。このような様々な取組がクロントイスラムの人々の住環境改善に大いに貢献している。

第8章 バンコクにおけるコミュニティ開発

8-1 バンコクの概要（菊地志織）

バンコクはタイの中部、チャオプラヤ川の低地平野に位置している。首都としてタイの政治、経済の中心的な役割を果たしている。人口は2005年現在565万8953人であり、タイ総人口の10%を占める（バンコク都ホームページ）。第二の都市であるナコンラチャシマ県の254万6763人の2倍であり、いかに人口が集中しているかがわかる。50の地区（District）と154の小区域（Sub-District）に分割されているおり、面積は1568 km²である。住宅地23%、農地23%、商工業地が29%を占める。面積はタイ76県のうち68番目で決して広くないが、人口の多さと人口密度を誇る東南アジア有数の大都市である。

その歴史はアユタヤ王朝時代にまでさかのぼる。当時、バンコクは小さな漁村だったが、アユタヤと結ぶ新しい運河が建設されたのに伴い、ヨーロッパからの関税港となった。商人、探検家、宣教師などが訪れるようになり、急速に経済発展を遂げた（バンコク都ホームページ）。その後、アユタヤ王朝滅亡後に興ったノタンブリー王朝、チャクリー王朝の首都となった。1960年代の急激な産業化に伴い、人々は雇用の機会を求めて農村からバンコクへと急激に流入した。当初、その多くは農村での生活向上のために一時的に労働にきており、都市を本格的な生活・生計の場とは考えなかった。次第に利便性と成功の機会を認識するにつれ、都市を主な生活の場とする人々が増加した（新津 1998 p. 261）。しかし、インフラ整備や住宅ストックが未成熟な中での急激な都市化は、過剰都市化¹や住宅不足をもたらした。インフォーマルセクター²に従事し生計を立てる人々は、沼地や湿地帯に不法にまたは借地契約を交わして居住するようになった。こうした地域に人口が集中、住居が過密化し、スラムが形成された。今日でもスラムの居住環境改善はバンコクの課題である。

8-2 スワンプルーコミュニティ（菅谷江里）

1970年代初期、広大な湿地に数世帯が家を建設し始め、その後拡大した。金融の中心機能が集中するオフィス街近隣に位置し、都心では最大コミュニティの1つである（遠藤 2007 p. 62）。COD Iの支援を受け、初めて住環境整備事業を実施したコミュニティでもある。2008年現在、財務省の所有地に822世帯が居住する。住民の多くは、運転手や商売、皿洗いや清掃などの日雇い労働者に従事している。平均月収は約2万



写真Ⅱ-3：スワンプルーコミュニティ住民

¹ 山川（2000）によると、発展途上国の都市化の大きな特徴は、都市が生産的に吸収しうる限度をはるかに超えた人口流入が起こることである。

² 遠藤（2003）によると、インフォーマルセクターとは小規模かつ組織化のレベルが低い経営形態や、低賃金もしくは不確実な賃金、社会厚生や保障の不適用などに規定される企業体である。

パーツである。

2004年4月23日、大火災が発生し、大半の住宅が全焼した。そのため、CODIから基盤整備として1490万パーツ、住宅建設の費用として4660万パーツの融資を受け（CODI 2008 p.28）、264世帯が参加するバーンマンコンプロジェクトが実施された。NHA主導で住宅を建設するバーンウアトンプロジェクトにも558世帯が参加した。前者に参加した住民からは、「住宅の取得と住宅登録が可能になった」「住環境がよくなり、以前と比べて住みやすくなった」と評価の声が聞かれる。しかし、NHA主導のバーンウアトンプロジェクトはいまだに進展していない。参加者の間で、住宅建設の進行に差が生じている。

コミュニティでは、1994年ごろから図書館を頻繁に活用していた子どもたちを中心に「青少年文化保護グループ」が立ち上げられた。活動は麻薬防止、ゴミ収集、文化行事などである（秦 2005 p.269）。環境プロジェクトとしてゴミと木を交換する予定もある。

8-3 クロントイスラム（塩野優）

首都バンコクには、タイでも歴史的に最も古い都市貧困者の居住地区が多く存在する（川澄 2006 p.41-42）。中でもクロントイスラムには多くの低所得者が居住している。港に隣接する立地条件から、港での仕事を求めて農村から来た人々が居住するようになり、次第に大きくなった。それらの人々は、国と借地契約を結んでいるスラム居住者と、借地契約を結ばずに居住するスクオッター居住者とに分けられる。スクオッター居住者には、湿地帯や路線近くで生活する人々もいる。

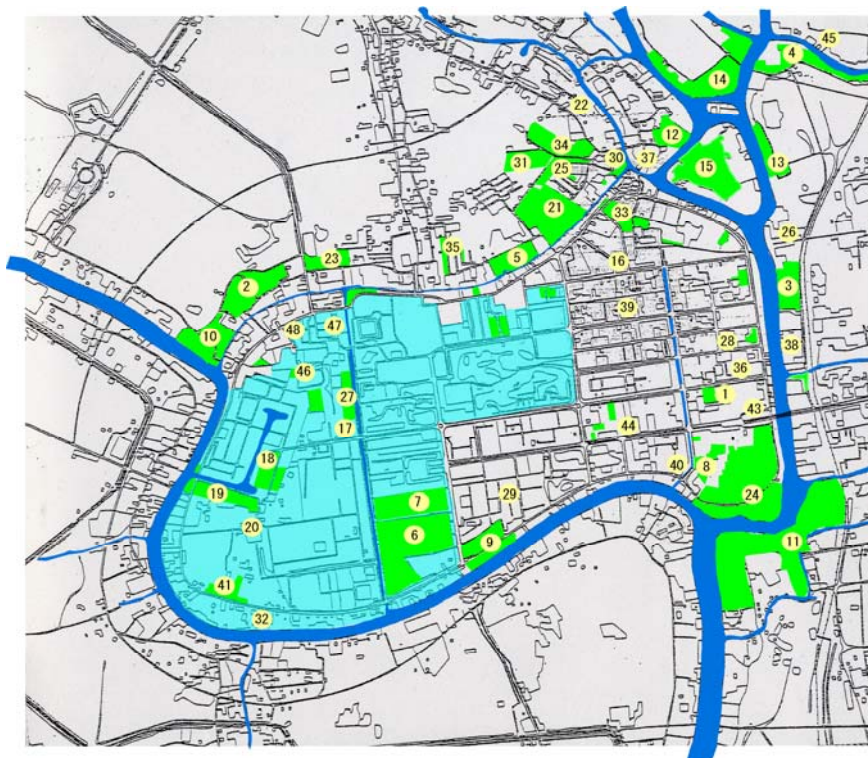


写真Ⅱ-4：クロントイスラム

未住宅登録者を含めると13万人が居住するという（川澄 2006 p.41-42）。大半の住民がタクシー、トゥクトゥクのドライバー、日雇いの建設や屋台などの不安定な職種に従事している。クロントイスラムが抱える問題は様々で、第一に社会基盤の未整備がある。スクオッター地域は不法占拠のため国の支援を受けることが難しい。電気、上下水道などが未整備なので、割高な料金を支払う世帯も数多い。第二に教育である。親の関心が低く、かつ貧困で通学できない子供には、インフォーマル部門しかなく、安定した収入を得られず貧困から抜け出せない。4つのNGOがその解決を図るべく活動している。マーシーセンターは主にエイズ対策、健康管理、教育、貯蓄組合、託児所、職業訓練を行っている。ドゥアン・プラティープ財団は教育、健康管理、社会福祉、人材育成、防災活動。Grassroots Development Instituteは、スラム改善、住民ネットワーク化を推進する。シーカーアジア財団は教育文化支援、人材育成、地域開発事業、アジア地域間交流、職業訓練を行う。4つのNGOが役割分担して活動している。

第9章 アユタヤにおけるコミュニティ開発

9-1 アユタヤの概要 (川久保剛)



図Ⅱ-2：アユタヤの地図

注：①図中で色を塗ってある箇所は、インフォーマルコミュニティの居住地を示している。

②図中で番号表記をしてある居住地は登録コミュニティ、番号表記がされていない居住地は非登録コミュニティの居住地を示している。

アユタヤ市は人口 13 万 5850 人（2004 年現在）でバンコクの北方 76 km、車で 1 時間圏に位置する。工業団地が建設されるなど、工業都市として発展している（秋谷 2007 p. 28）。

歴史的には、1351 年の初代アユタヤ王であるウートン王が即位して建国してから、1767 年のビルマのコンバウン朝のシンビューシン王による攻撃で崩壊するまでアユタヤ王朝の首都であった。15～17 世紀の「交易の時代」には外国船が多数入港し、チャオプラヤ川沿いに外国人町が並び、ポルトガル人、ベトナム人、中国人、日本人などが多数居住する国際都市であった（柿崎 2007 p. 60-63）。1991 年には史跡が世界遺産に登録され、観光産業も地域経済の主要な柱となりつつある（秋谷・藤井 2005 p. 734）。

2000 年に COD I、NHA 及び NGO が行った調査によると、アユタヤには 53 のインフォーマルコミュニティ³があり、史跡のあるアユタヤ島の周辺に多く分布している（藤井・安 2001 p. 45）。国や寺院などの敷地内に居住し、地代を支払っているスラム⁴居住者や、寺

³ アユタヤ市によって認定された住環境・都市環境、政治上で問題があるコミュニティを指す。

⁴ 穂坂（1994）によると、スラムは、物理的環境の劣悪な主として低所得層からなる居住地の総称。法的に土地の所有や借地が認められているか、地主との借地契約を結んでいるのが特徴である。

院やモスクなどの土地に不法に占拠し居住するスクオッター⁵の2種類が存在し、その大半は住環境上の問題を抱えている。アユタヤ市では、インフォーマルコミュニティの開発・支援を目的として、条件の合ったコミュニティを登録コミュニティ⁶と指定し、財政的な支援を実施している。しかし、53のインフォーマルコミュニティには、市の登録を受けていないコミュニティも存在する（図II-2）。登録コミュニティでは、アユタヤ市からの支援により組織化が進むが、非登録コミュニティでは、CODIなどの支援を受けるか、未だにコミュニティが組織されないなど、行政の支援に差が生じている（秋谷・藤井 2008 p. 153）。アユタヤのスラムには7450棟の住宅があり、3万249人が居住している⁷。土地所有者は国や寺院が多く、個人所有は少ない（秋谷・藤井 2005 p. 735）。こうした居住特性により、コミュニティは常に立ち退き問題をかかえている。加えて、住宅の老朽化・過密化、排水・歩道の未整備、貧困・失業、麻薬や洪水問題を抱えており、それらへの取り組みが課題となっている。

9-2 アーカンソークロックコミュニティ（清水皓太）

アーカンソークロックコミュニティはアユタヤ市の歴史的遺構である道路に囲まれる。財務局の所有地に68世帯130人が住んでいる。住民は工場労働者、マッサージ、露天商、日雇い労働などに従事し、平均月収は約5000バーツである。

コミュニティの歴史は、50年前に火災被害を受けた住人にアユタヤ市が低所宅者向け賃貸住宅を建設したことに遡る。建設当初、湿地帯に1棟20戸の住宅が2棟建設され、40人が入居した（秋谷 2005



写真II-5：アーカンソークロックコミュニティの新家屋

p. 735)。80年代後半に各家庭の子供が成長し、それぞれ家庭を持つようになると、空き地に次々と住宅が建設された。その結果、住居の過密化や排水問題、環境の悪化などが生じた。当時、電気や水道は全世帯には敷設されていなかった。それらを自力で敷設した裕福な世帯に、貧困者世帯が高額な料金を支払い使用していた。

1995年の洪水被害を契機として、住環境改善の機運が高まった。1998年、UCDOの支援により貯蓄口座⁸、住宅協同組合⁹が設立された。返済の見込みが立たないと辞退した2世

⁵ 穂坂（1994）によると、スクオッターは、土地保有条件の「無権利性」を最大の特徴とする。地主との土地契約なしで占拠している居住地。穂坂はスラムの居住地はスクオッター地区も含むとする。

⁶ 登録コミュニティの条件：①住民が長く居住し、住民選挙で選出された委員会があり、行政との協力関係を維持している、②20から50戸で構成、③地区の区分が明確、④貯蓄グループや企業グループなどが組織され、コミュニティ活動が活発であることなどが条件となっている。

⁷ 秋谷（2007）p.33を基に筆者算出。

⁸ 住民が相互扶助を前提にコミュニティ名義の口座に貯蓄し、借入れ住民に対して一定の利息をつけ貸し

帯と移転を決めた 2 世帯を除き、64 世帯が参加して貯蓄活動が開始された（秋谷 2007 p.129）。この活動が評価され、COD I や NHA から 260 万バーツの支援を受けて、住環境改善事業を実施した。住民は住みたい家のデザインを描きあい、計画案を策定した。新住宅は、2002 年に完成した（写真Ⅱ-5）。

9-3 ポンペットコミュニティ（栗野厚基）

スワンダララーム寺院の敷地にあるポンペットコミュニティには、300 世帯約 2000 人が居住する。住民の大半が会社員、または露天商で平均収入は月 7000 バーツである。ゴミや生活排水の床下への垂れ流しによる居住環境の悪化や貧困などの問題を抱えている。



写真Ⅱ-6：ポンペットコミュニティの女性グループ

コミュニティでは自治委員会が組織されており、21 名が委員となっている。コミュニティ活動として以下のものが実施されている。

- 1) 住民 220 人の参加のもと、借金問題の解決及び起業などを目的とした貯蓄活動。
- 2) 老人グループのメンバー 700 人の参加のもと、貧困者世帯への資金の貸付や葬式資金の積み立てを目的とした貯蓄活動。
- 3) 女性グループによる造花の販売などの所得向上を目的とした活動。

とりわけ、女性グループの活動は活発で造花販売には約 20 名が参加している。100 本で 20 バーツの利益となり、月平均 1 人 3000 から 4000 バーツの収益を上げている。用済み油をバイオディーゼルの燃料にリサイクルするなど、環境に対する取り組みも活発である。

9-4 プーカオトンコミュニティ（鶴岡舞）

チャオプラヤ川に隣接し、415 世帯 2113 人が居住する。露天商や公務員の住民もいるが、多くは「クラジョーン」という竹細工の魚を作る仕事に従事する。この魚をモチーフにした工芸品は 5 バーツで売られている。住民の平均月収は、約 4000 バーツである。



写真Ⅱ-7：プーカオトンコミュニティ

コミュニティが抱える一番の問題に洪水がある。毎年雨季になると家の 2 階まで水位が上

与える為の口座である。

⁹ プロジェクト実施のために COD I の受け皿として組織され、融資資金の管理、住環境改善事業進行の監督及びプロジェクト終了後の返済などの管理及び運営を目的とした組合である。

昇するため、多くの家屋が高床である。この季節は生活のほとんどを水上で行い、露天商はボートに乗って商売を行う。

住環境整備に関してCODIの支援は一切受けていない。その理由として「行政による融資のみで住民の生活は賄えているから」と住民は述べている。行政の支援は主に食料品や生活用品の支給、金銭的な援助、道路の改善などである。かつてはゴミも深刻な問題となっていたが、月に30バーツ支払うことで、収集車が毎朝ゴミを回収するようになり、状況が非常に改善されたとの声が聞かれた。以前は生活排水をそのまま川に流していたが、近年それを処理するプロジェクトが進み、汚水の問題は改善されている。

健康問題として周辺のスラム同様デング熱があり、行政から金銭的援助や薬の支給がある。洪水（水質問題）による皮膚病や皮膚アレルギーなどもある。農村部にあつて家族と過ごす時間が長く、常に目が届く状態のために麻薬問題は深刻ではないと住民は述べていた。最も深刻な問題は、飲み水の改善である。今後も行政の支援を受けながら生活環境の改善に取り組む。クラジオーンの原料である竹で、ティッシュペーパーを作る活動も計画している。

9-5 ランプルアンコミュニティ・農業センター（菊地志織）

農業センターは、コミュニティ内の農業トレーニングセンターとして1985年に設立された。日本のJICA、ラオス、ベトナム、香港からの視察とともに、各国の大学から学生が大勢訪れ勉強に来るほど有名である。設立当初は多くの問題を抱えていたが、それらを解決して現在の規模を誇るセンターへと成長した。

センターの問題のうち、最も深刻なものは洪水であった。洪水は農作物や人々、特に教育システムに影響を与え、被害は甚大であった。そのため十分な教育環境が整わず、教育をうける機会を設けることが難しく貧困につながってしまうという状況であった。洪水からこの地区を守るために土地改良プロジェクトが行われ、大きな農地を得ることができた。洪水の被害を防ぎ、一年を通して農業を営むことができるようになり、米だけでなく野菜も栽培している。野菜出荷量はタイ1位を誇り、大半がバンコクへ出荷されている。野菜の出荷は、1日10回ほど行なわれている。

野菜の出荷場では約20人の労働者が1日8時間、週に6日ローテーションを組んで働いている。1日の賃金は約200バーツである。バンコクで働く労働者の賃金が約1日180バーツであるため、若干高額であるといえる。しかし、農業センターの出荷場で働いている人々



写真Ⅱ-8：ランプルアンコミュニティ
農業センター

は、収入を作物のできに依存せざるをえないという問題を抱えている。

住民の中には日本やイスラエルの農業センターを訪れ、そこで学んだ知識や技術を、農業センターに役立てている人もいる。そうした1人であるカムチャンさんは、9年ほどイスラエルの農家で働き、農業の知識と経験を学んできた。カムチャンさんは「タイとイスラエルとでは農業の現状が異なるが、タイの農家には意識改革が必要である」と強く述べていた。そのためには、「農家が抱えている問題を認識し、それを解決するために人々が集まってアイデアを出し合い、一緒に取り組む必要がある」と述べた。同コミュニティのリーダーも「農業の発展のためにも海外の技術を学び、それを活かす研修システムをタイ政府も積極的に推進している。今後ともそうした政策を継続して行くことが重要である」と述べていた。

コミュニティを訪れて、農村でのコミュニティ活動や農地拡大のための活動を知ることができた。彼らは農業の収穫量によって収入が左右されてしまう現状の中、家族単位または近所同士という気心が知れた仲で、熱心に仕事に打ち込んでいる。コミュニティそのものの温かさや親密感を感じることができた。

第10章 グループによる研究成果

10-1 コミュニティにおける住環境改善事業～バンコク及びアユタヤの都市貧困層コミュニティの事例より～（グループ1：猪子景子・川久保剛・清水皓太・鶴岡舞）

研究の背景として、都市部に人口流入が顕著であることが挙げられる。国連人間居住計画（UN-HABITAT）の2005年時点の統計では、世界の都市人口31億7000万人の約3割、10億人がスラム地域に居住しており、さらに年率2.2%で増加している（城所 2007 p.3）。人口流入によるスラムの居住環境の悪化を改善する方策に興味を持ち、住民が安定かつ適切な住まいを獲得するためにも住環境改善が不可欠であると考え、テーマとした。

スラムにおける住環境改善、とりわけ都市計画分野では、城所（2007）による居住改善の変遷、川澄（2008）によるCODIによる住環境整備事業、藤井ら（2001）による住環境整備事業の展開とCODIの役割についての研究などが見られる。それらの研究で、住宅改善プロセスやコミュニティネットワークを通じたボトムアップ型開発の有効性が明らかにされた。しかし、住環境改善事業の実像及び課題などの点については明らかとなっていない。

本研究では、住環境改善に取り組むクロントイスラム、スワンプルーコミュニティ、アーカンソークロコミュニティの3つに焦点を当てる。活動の実像と、住環境改善事業の今後の課題を明らかにすることを研究の目的とする。本研究のために、文献研究並びに、2008年9月2日から9日の期間、バンコク及びアユタヤで聞き取り調査を実施した。

10-1-1 クロントイスラムの住環境問題

クロントイスラムでは、住民の多くが日雇い労働である（詳細は8-3を参照のこと）。同コミュニティではドラッグ、教育、健康、洪水、火災などの問題を抱えている。クロントイ地区で活躍するプラティーブ財団やシーカーアジア財団などのNGOが積極的に支援している。

同地では、大半が借地契約を結んで居住しているが、契約なしに居住するスクオッター地区もある。湿地帯の上に住居を構えているため、雨が降ると床下に水が溜まってしまう。

同地では、NHAなどの支援を受けて、電気・上下水道などの社会基盤が整備されており、住環境が改善している地域も見られる。しかし、スクオッター地区においては、排水の未整備など社会基盤に問題を抱えている。コミュニティ活動は、ゴミの分別・医療支援、衛生改善・職業訓練・ボランティアによる麻薬予防のパトロール等が行われている。

クロントイスラムでは、住民の主体的な取り組みやNGOの支援により、住環境、電気・



写真Ⅱ-9：クロントイスラム

上下水道などの社会基盤が整備されている。今後は、安定した借地契約などの土地問題に取り組むことが重要である。

10-1-2 スワンプルーコミュニティの住環境整備事業

スワンプルーコミュニティには、約 1200 人が居住している。住民の多くは、タクシードライバー、レストランのウェイトレス、シェフなどの日雇いに従事している。住民の平均日収は、220 バーツである。ゴミやドラッグの問題を抱えている。コミュニティ活動として、道路の清掃活動などが行われている(詳細は8-2を参照)。

同コミュニティでは、火災により大半の住宅が被害を受けたことが契機となり、2003年、低所得者向けにCOD Iのパーマンコンプロジェクトが実施された。電気・水道・道路などのインフラ敷設、新家屋の完成により住環境は一変し、汚水やごみ問題は改善した。

スワンプルーコミュニティでは、貯蓄グループを組織化し、その活動をCOD Iなどが支援することで、電気・道路などのインフラ整備が可能となっている。1)所得が比較的低いいため、住宅の費用返済が困難、2)住宅は各自の所有であるが、土地の所有権ははまだ財務局にあり、返済終了の15年後以降も継続して居住できるかどうかは今後の課題である。



写真Ⅱ-10：スワンプルーコミュニティ

10-1-3 アーカンソークロックコミュニティの住環境改善事業

タイで初めてCOD Iやネットワークなどの支援を受けて、オンサイトによる住環境改善事業を実施したコミュニティである(詳細は9-2を参照)。

それ以前は、住宅や電気・上下水道などが未整備であり、住宅の過密化などの問題を抱えていた。こうした問題を改善するために、住民同士が話し合い、貯蓄口座を開設し、取り組みを開始した。COD I・NHA・テサバン・ネットワークが支援し、COD Iが派遣した建築家の



写真Ⅱ-11：アーカンソークロックコミュニティ

の指導のもと。住民は新住宅の計画案を作成した。そしてテラスハウスの2階建て住居に建替えられ、排水、電気も敷設されるなど住環境が大幅に改善された。しかし、コミュニティの敷地が財務局の所有地であるため、期限の2017年に再び借地契約を更新できるかは不透明である。

アーカンソークロックコミュニティでの事業が、現在タイ全土で実施されているバーマンコンプロジェクトの礎を築いたと言える。都市貧困層の主体的な取り組みを、COD I やその他のアクターが支援することにより、彼ら・彼女らにも住宅取得を可能にした点において、大きな成果である。しかし、他のコミュニティ同様、契約更新が課題となっている。

10-1-4 まとめ

バンコク及びアユタヤの事例から、以下のことが明らかとなった。第一に、住民の主体的な活動やNGO、行政などの支援により、コミュニティの住環境改善に対する取り組みが実施されている。第二に、都市貧困層においても貯蓄活動を実施し、その信用をもとにCOD I等の支援を受けて、住宅の取得が可能である。第三に、バーマンコンプロジェクトに参加、不参加にかかわらず、土地の借地問題を抱えている。

長い間住宅にアクセスできなかった人々にも、貯蓄活動を実施することで、住宅を所有する道が開かれたという点において、COD Iのバーマンコンプロジェクトは大きな成果をあげている。都市貧困層を対象とした住環境改善事業では、ただ単に住宅を取得するだけではなく、事業の計画、立案、実施に住民が主体的に参加することにより、住民の活動能力の自立を促してもいる。ハード面・ソフト面から取り組みは、同様の問題を抱える他の国にも有益な示唆を与えるものである。

タイでは、土地の多くが公有地であるという特性から、多くのコミュニティにおいて土地問題が課題となっている。近年、バーマンコンプロジェクトにおいて、土地と住宅の取得を併せて行っているが、永続的な居住地をいかに確保するかが課題となっている。

10-2 こどもの教育の重要性と親の意識に関する研究～アユタヤのコミュニティの事例より～（グループ2：伊藤智史・佐藤賢子・塩野優）

貧困と教育の関係性及びコミュニティの教育については、山内（2003）による教育と経済発展についての研究、岡田（2004）による貧困と教育の影響についての研究、塚本（2003）によるこどもの環境認知についての研究がみられる。それらの先行研究は、貧困層における学校教育について明らかにした。しかし、教育に対する両親の意識については明らかとなっていない。従って、本研究のテーマとした。

子どもへの教育活動が実施されているアーカンソークロックコミュニティ、プーカオトンコミュニティ、クロンタキアンコミュニティを対象に、子どもに対するコミュニティ活動に焦点を当てた。教育活動の把握、及び両親の教育に対する意識を明らかにすることを調査の目的とした。本研究のために、対象コミュニティの住民からの聞き取り調査を実施した。

10-2-1 アーカンソークロックコミュニティの教育の活動

アーカンソークロックコミュニティでは、タイの伝統舞踊であるタイダンス教育、本の読

み聞かせ、フラフープや卓球などのスポーツ活動を実施している。筆者らが同コミュニティを訪れた際には、コミュニティ内の広場に遊具があり、多くの子どもたちが遊んでいた。活動を実施する理由として、タイダンス教育及び本の読み聞かせを指導しているオッド氏は、「タイダンスは、タイ人の伝統を学び、それを継承してもらうため」と述べた。加えて、本の読み聞かせを実施する理由として、「自分たちの幼い



写真Ⅱ-12：アーカンソークロ
コミュニティの子どもたち

ころは家が貧しいために学校に通うことが出来なかった人たちが多くおり、このコミュニティで生まれ育った大半の人々がそうである。そのような人たちは、小学校4年で学校を卒業すると家計を支えるために働いていたため、字の読み書きがうまく出来ない。小さいころから本を読むことにより、字の読み書きが出来るだけでなく、様々な知識を得ることが出来る。子どもたちにそのような習慣を身につけさせたくて、本の読み聞かせを行っている」と述べた。オッドさんの話を聞いて、住民自身が子どもの頃に満足に学校に通うことができなかったため、子どもたちに自分たちのように辛い目にあわせたくないという気持ちから本の読み聞かせを実施しているように思えた。

同コミュニティでは、子どもの貯蓄活動も実施していた。毎日子どもに1パーツを貯蓄させ、週末に総額を銀行に預金するという活動であった。同コミュニティでは借金が長年の問題の一つであった。大人になって借金を作らないよう、適切な資金のやりくりを身につけさせるため、子どもの貯蓄活動が実施された。最盛期には20人を超える子どもたちが参加していた。しかし、2008年9月現在、子どもの貯蓄活動は停止している。その理由として、コミュニティ住民から、「両親の子どもに対する意識が低いために、この活動に対する理解が得られなかった」との意見も聞かれた。学校に通わずに、昼間からコミュニティ内で遊んでいる子どもの姿も見られ、両親が教育の重要性を認識していないと考えられる世帯も見られる。本の読み聞かせに関しては、親が自身の経験により、この活動の重要性を十分に理解しているように考えられる。しかし、子どもの貯蓄活動に対しては、その重要性を十分に認識していない世帯があることが明らかとなった。

10-2-2 プーカオトンコミュニティの教育の活動

プーカオトンコミュニティには、6歳から17歳の子どもたちが93人住んでいる(詳細は、9-4を参照)。同コミュニティでは、子どもに対しての教育活動は特に行われていない。住民の多くが低所得であることから、家計を支えるために、子どもたちは学校から帰ってきた後や休みの日に、ハンドクラフト(竹を使用し作る魚)を手伝っている。ヒアリングによると、子ども1人を小学校に通わせるのに年間2000パーツ、中学校では4500パーツか

かる。平均月収が約 4000 バーツであることを考えると、大きな負担となっていることが伺える。住民の中には、義務教育終了後は高校に進学しないで働いて欲しいと考える両親もみられた。

子どもたちは学校に通っているが、教育費が大きな家計の負担となっている。教育の重要性を十分に認識していながらも、高等教育を受けないで中学校卒業後は働いて欲しいと臨んでいる世帯が多いことが明らかとなった。



写真Ⅱ-13：プーカオトンコミュニティのハンモックで遊ぶ子ども

10-2-3 クロンタキアンコミュニティの教育活動

クロンタキアンコミュニティでは、ボーイスカウトや宗教の勉強などを行っている。国からの支援により、薬物防止活動も実施している。

同コミュニティには 3 つの学校があり、3~12 歳まで、3~15 歳まで、3~18 歳までの学校に計 2000 人の子どもが通っている。卒業した子どもたちの多くは、大学へ進学している。住民の大半がイスラーム教徒であり、宗教教育が熱心に行なわれている。イスラーム教の学校があり、チェンマイなどの地方から来ている子どもも多く居住している。それらの子どもたちには、1 カ月 2000 バーツの下宿先が用意されている。お金のない子どもには無料昼食の支援もしており、コミュニティ全体で学校の運営を支援している。



写真Ⅱ-14：コミュニティ内の学校

午前中は数学などの授業を受講し、午後からはモスクで、アラビア語で書かれたクルアーン（コーラン）などの勉強をしている。ここに建設された学校には、他の国からの援助によって建てられたものもある。サウジアラビアやインドネシアなどと交流があり、奨学金などの留学支援を受けている。留学後、コミュニティに戻ってきて学校の先生や翻訳家、医者になるものも多にいる。

午前中は数学などの授業を受講し、午後からはモスクで、アラビア語で書かれたクルアーン（コーラン）などの勉強をしている。ここに建設された学校には、他の国からの援助によって建てられたものもある。サウジアラビアやインドネシアなどと交流があり、奨学金などの留学支援を受けている。留学後、コミュニティに戻ってきて学校の先生や翻訳家、医者になるものも多にいる。

10-2-4 まとめ

アユタヤのコミュニティにおいては、本の読み聞かせ、子どものための貯蓄活動、宗教教育など様々な活動が実施されている。しかし、コミュニティによって、子どもたちに対しての活動及び両親の教育に対する意識の違いがみられた。

アーカンソークロココミュニティでは、タイダンスや本の読み聞かせなどの活動を実施

しており、子どもの教育に対する意識が高いと思われる。しかし、子どもの貯蓄活動が停止しており、子どもの教育に対する理解が浅い世帯もある。

プーカオトンコミュニティでは特に子どもたちに対しての活動は行われていない。また、教育費用が負担となるため、義務教育のみの就学を望み、子どもに高等教育を受けさせることが出来ない世帯が多いことが明らかとなった。

クロンタキアンコミュニティでは、コミュニティ全体で子どもの教育活動を積極的に支援している。住民の大半がイスラーム教徒であるため、結びつきが強いということも言えるが、住民が教育の重要性を認識しているためであると考えられる。

教育はその人自身の可能性を広げ、教育レベルの向上によってその国の経済発展にもつながる。両親の子どもの教育に対する考えはどの地域も共通しており、それは教育がとても重要であるということであった。教育によって学力が向上し、将来の仕事の選択肢を広げることができる。それが貧困からの脱出につながる。しかし、教育費用が負担となるため義務教育しか受けさせることが出来ない両親や、子どもの活動の重要性を認識していない両親もみられた。山内太は、「両親が高い教育を受けていることによって、子どもにより高い能力が身に付く傾向がある」と指摘しているが（山内 2003 p. 267）、両親の教育水準が子どもの教育に影響を与えている傾向はヒアリングからも見て取れた。

子どもの教育レベルの底上げには、両親の意識改善が重要であると考えられる。両親と子どもと一緒に参加できる活動をすれば、意識が改善され、子どもによりレベルの高い教育を受けさせたいと思うようになると思われる。例えば、両親が子どもの受けている授業と一緒に参加し、勉強の楽しさや大切さを認識する。そして、子どもはレベルの高い教育を受けることによって職業の選択肢が広がり、収入の安定した職業に就くことができると考えられる。

こうした取り組みによって両親の認識が増しても、金銭的な問題が大きな壁となることが予想される。行政などが教育費用の支援や奨学金の貸与を積極的に実施する必要がある。

10-3 コミュニティにおける衛生環境改善（グループ3：栗野厚基・菊地志織・菅谷江里）

筆者らは、適切な衛生環境の下で生活するために、各コミュニティが実施する衛生環境改善活動に興味を抱き、現地調査を実施した。

スラムの衛生環境、とりわけ居住環境については、川澄厚志（2006年）によるクロントイスラムにおける居住環境改善、秦辰也（2003年）による居住環境政策の変遷の中での住民参加、城所哲夫、片山恵美子（2004年）によるコミュニティ内外のネットワークを活かした居住環境改善等の研究が見られる。それらの既往研究では、居住環境改善を行ったことでの住民の意識変化、住民参加と住民ネットワークの重要性が明らかになっている。これらを踏まえ、衛生環境改善の重要性を様々な側面から考えることをテーマとした。

クロントイコミュニティ、ポンペットコミュニティ、アーカンソークロックコミュニティ

に焦点を当て、衛生環境に対する各コミュニティの取り組み及び環境教育について明らかにすることを目的とする。これらの対する取り組みは、コミュニティ住民の衛生環境に対する意識に変化を及ぼすという仮説を立て、それを検証した。本研究の目的を達成するために、先行研究のレビュー及び2008年8月31日から9月9日まで、バンコク及びアユタヤの都市貧困層コミュニティ住民へのインタビュー調査を実施した。

10-3-1 クロントイスラムの衛生環境改善に対する活動

クロントイスラムについては、8-3を参照していただきたい。クロントイスラムが抱えるゴミ問題に対して、卵とゴミを交換する活動が実施されている。コミュニティリーダーを中心に、清掃活動を始めたことが契機となり、環境保護グループが主体となって1997年8月に開始された。

川澄は、ゴミを現金やクーポン券と交換せず卵と交換する理由は、麻薬や酒の購入や、それを生業にすることの防止にあると指摘している（川澄2006 p.50）。住民のニーズに即した交換はインセンティブを生み出し、居住地のゴミが減少することで、他の衛生環境改善の活動へと波及している。2008年9月現在、植木とゴミを交換するプロジェクトや、黒砂糖、水、生ゴミなどを混ぜて作るイーエム菌という水を浄化する菌を作り、水質を改善する活動も実施されている。卵とゴミの交換活動を通して、住民の衛生環境に対する意識が向上し、持続的な活動へとつながっている。



写真Ⅱ-15：卵とゴミの交換プロジェクト
（川澄厚志氏撮影）

10-3-2 ポンペットコミュニティの水の浄化活動

ポンペットコミュニティでは、老人グループ、使用済み油をバイオディーゼルの燃料にリサイクルする主婦グループ、所得向上を目的とする貯蓄グループがある（9-3参照）。

同コミュニティが抱えている問題は、ゴミと水質汚濁である。住民がゴミを川や排水溝に捨ててしまうために排水溝が詰まったり、水質が汚染されていた。こうした衛生環境の悪化を改善するために、同コミュニティでは川に堆積しているゴミを取り除き、それと併せてフィルターを作り水質を改善する活動を実施した。この活動によりゴミが減少し、衛生環境が改善された。住民からは「ゴミを適切に処分することで、デング熱などの健康被害も減少し、



写真Ⅱ-16：ポンペットコミュニティ

健康にとっても有益である」、「適切な生活環境下で生活することの大切さを認識した」との意見が聞かれた。衛生環境の改善は、水がきれいになるという効果のみではなく、環境に対する意識の向上を促すという啓発的な効果ももたらしている。さらに、家庭で使用した水をろ過し、きれいな水に戻してから川に流す活動を計画するなど、活動が広がりを見せている。

10-3-3 アーカンソークロココミュニティの衛生環境改善活動

アーカンソークロココミュニティでは、オソモー委員会¹⁰が組織され、行政からの資金援助をもとに衛生環境向上に取り組んでいる。

同コミュニティの歴史は、約50年前に貧困者向け住宅が建設されたことに遡る。その後、次第に人口が増加し、居住環境が過密化したこと、1995年の洪水の被害にあったこと等が契機となり、2002年に住環境改善事業を実施した（詳細は9-2を参照）。事業実施後、活動に対する自信から環境改善の意識が向上した。



写真Ⅱ-17：アーカンソークロココミュニティ住民による植樹

自らの手で住環境を改善したことで、各住民が所有者意識を持ち始めたのである。こうした住民の意識の変化により、事業実施後も、木や花を植樹するなどの活動が行われている。この活動は、コミュニティ内の緑化と、意識を高めるといった面でのプラスの働きをしていると考えられる。さらに、リサイクル活動へとその効果は波及している。ペットボトル、缶、紙などを他のゴミと分別して収集し、小ビン1キロ1パーツ、ビール瓶2本2パーツ、缶1キロ1パーツ、紙1キロ5パーツでお金と交換されている。

同コミュニティでは、ゴミを設置されたゴミ箱に捨てるように指導するとともに、毎日それぞれの区画で集められるゴミをごみ収集場に運ぶことを日課とするなど、子どもの環境教育にも力を入れている。ある住民は「日課とすることで、子どもにもゴミはきちんとゴミ箱に捨てるという意識が生まれる。環境に対する意識向上につながるため非常に重要である」と述べていた。

アーカンソークロココミュニティでは、住宅改善事業の結果、衛生環境に対する意識が向上し、それが他の活動にも波及している。事業実施を契機として、住宅のみでなく環境面も向上したことで、コミュニティ全体の環境をよりよくしようとする意識が各住民に芽生え、それが緑化活動やリサイクル活動につながっている。さらに、コミュニティの将来

¹⁰ 正式名所は Public Health Volunteer で保健省に属し、コミュニティ住民の健康の向上を目的にした活動を実施する組織である。オソモー委員会は、自治体の支援の基に各コミュニティに組織され、住民への薬の配布や健康に関する啓発活動などの活動を実施している。各コミュニティにそれぞれオソモー委員が10名程度いる。それぞれの自治体では管轄下にあるコミュニティ全体のオソモー委員を集めて月に1~2度程度の頻度で集会を開催している。

を担う子ども達への環境教育は、生活環境を清潔に保つことの重要性を認識させるためにも重要である。両親の世代から次世代へと、適切な衛生環境を保つことの重要性の認識や活動能力が継承されていくと考えられる。

English Summary

Faculty of Regional Development Studies of Toyo University conducted a workshop at Chulalongkorn University in Thailand from August 31st to September 13th, 2008. It was entitled, TOYO Summer Workshop 2008 Program “City Planning and Community Development”. Ten students from the Faculty of RDS joined the workshop. At one time we almost gave up the workshop due to an emergency that was declared during our stay in Thailand. Despite such difficult circumstances, the students conducted the survey with a lot of energy, and we learnt about community development in Thailand. This report is to introduce and represent what we have obtained through the lectures and fieldworks in the workshop, which was planned and organized to meet “empirical approach”, the fundamental philosophy of the Faculty of RDS.

Chapter 5 gives a general view of Thailand; Geography, population and history. Thailand is located in the centre of Indochina, bordered by Myanmar in the west and north, Laos in the north east, Cambodia in the east, and Malaysia in the south. Population was 65.75 million in 2007. It is a multi-ethnic country that consists of Thai (85%), Chinese (10%) and other ethnic minorities. The multi-ethnic nature is reflected in the religious diversity. 90 % of people are Buddhist, the rest are Muslim, Christian and Hindu.

Chapter 6 summarizes the three lectures given in the workshop; “Thai culture”, “City Planning of Bangkok” and “Community Development in Ayutthaya”. 6-1 is a report on “Thai culture” by Asst. Prof. Pavika Sriratanaban. The content of this lecture was about ideas of culture, and culture in society and so on. In 6-2, the report draws from a lecture on “city planning of Bangkok” by Asst. Prof. Napanat Tapananont. It highlights that the westernization of Bangkok has made traffic much worse, while the major transportation system has shifted from water to rail and car. We have learnt that partnership among slum inhabitants, local government and NGOs is very important. 6-3 is about “Community Development in Ayutthaya” by Prof. Sutham Chatachin. CODI is a supporting organization for housing. Behind this was that community inhabitants understood well the community’s problems and the importance of saving money. Moreover, this study finds network building among communities is very important.

Chapter 7 describes CODI and the Duang Prateep Foundation. 7-1 explains the outline of the CODI activities in slum communities. CODI promotes “saving” by residents in the community, and that by lending money for the community networks, not only to individuals, it develops flexible approaches to each community. CODI contributes to the improvement of housing conditions of the poor in the city. CODI also works for environmental issues in the communities such as garbage and drainage systems. 7-2 is about a well known Non-Profit-Organization, the Duang Prateep Foundation which takes actions in Klong Toey slum. The NPO works for education, health care, welfare, and disaster prevention.

Chapter 8 describes community development in Bangkok. 8-1 is a summary of Bangkok’s

population, geographical features, modern history (1960s~present) and problems including its huge slum community. 8-2 is about Suan Phlu community, and clarifies three important findings. At first, the community is supported by Baan Mankong and Baan Eua Arthorn. Secondly, a youth group was set up for preventing drug abuse. Thirdly, the community has a plan to exchange garbage for trees. 8-3 is a report on Klong Toey slum. Many poor people living in the slum are squatters. They have difficulties with accessing basic infrastructure and education. Some NGOs conduct various approaches to the issues.

Chapter 9 explains the community development in Ayutthaya. 9-1 is a report about the outline of Ayutthaya. The manufacturing and tourism industries are economic pillars, while there are a lot of slums and squatter residents who illegally occupy the land they do not own, creating environmental problems. As a result they are not provided services by the local administration. They face many other issues such as eviction, sanitation, unemployment, drug abuse and floods. 9-2 points out what the CBO has achieved and the problems they still face in Arkhansongkrot community. While the residents' self-help activities improved their housing conditions, educational and drug issues of children still remain in the community. 9-3 illuminates the outline of Phomphet community. The major finding is that the community committee supports a variety of saving activities. One is such activity for initiating business, another by aged community members is to help poorer families, and the third one is by women groups for income generation. 9-4 refers to the outline of the Phukhawthon community. In this community, residents took initiatives and have improved drainage problems. 9-5 explains about a farming center in Ayutthaya. They grow vegetables and ship them to Bangkok. A number of the residents in Ayutthaya are engaged in agriculture, and they can work without stress. After facing a flood disaster, they had a land reform project which made the center famous over the world.

Results of group surveys are shown in Chapter 10. 10-1 deals with the environmental improvement in the three poor communities in Bangkok and Ayutthaya. In this survey, we have found: (1) The residents have themselves endeavored to improve their environment with the support of NGOs and public agencies, (2) CODI funded housing for the poorer residents when they acquire the habit of saving, (3) Renewal of the lease on the land is the common problem for all the communities. Based on these findings, we have evaluated the project for improving the housing and resident's economic capabilities. Although progress is slow, it is an excellent example of cooperation among NGOs, CODI and community networks. 10-2 is about the research on children's education and parent's consciousness. We have surveyed the educational activities and parent's consciousness in three communities in Ayutthaya. We have identified some economic conditions which are related to the educational activity. 10-3 is about the improvement of the sanitary environment in Bangkok. In a community, parents teach their children the importance of the environment. The activities are effective for making better sanitation and environmental education for Bangkok residents.

秋学期のゼミの最後に、合同発表会を行った。学生たちはフィリピンとタイの個別報告を聞いた後に、意見交換をし、レポートを提出した。本章は、そのときのレポートをもとに、両者の共通点と相違点について、秋谷と子島がまとめたものである。最後に、来年度以降の課題についても指摘しておく。

まずコミュニティ開発の共通点として、居住の権利を獲得するための活動が先行していることが挙げられる。かつては、両国ともにスラムの強制撤去と移住が基本であった。しかし、財政的な負担が大きい割には環境改善に結びつかず、スラムの住民組織を主体とする開発へと基本政策の転換が生じた。いつ追い出されるかもしれないという不安を抱えた状態では土地への愛着も生まれようがないが、居住の権利を確保することで、住民の間にコミュニティ意識が芽生えていく。やがて、行政やNGOと連携しつつ「自らのコミュニティのため」のさまざまな活動（子どもの教育、女性の権利向上、ゴミ問題の解消）に乗り出すのである。

居住権の確保は共通点であるが、宅地を購入できるかどうかで、両者は違いを見せる。セブでは市が住民による土地購入を導入したが、タイでは王室保有地や国有地の取得がきわめて難しく、将来的に、借地権の更新が問題となろう。ただし、政府の支援体制が脆弱なフィリピンにおけるインフラ整備は、タイに比べて格段に弱いという印象である。タイでは、政府の財政支援のもと、COD IやNHAが実際の住環境整備にあたるという分業が確立している。

今後の調査・研究課題として、4点を挙げておきたい。

- 1)スラム住民のライフヒストリー聞き取りによる生活の変遷
- 2)スラム内において生じている貧富の格差
- 3)当該都市社会におけるスラムの位置づけ
- 4)コミュニティ開発活動への参加

1)と2)は、ミクロな視点からのスラムの動態把握に有効である。今回、「貧しい人々が住んでいる劣悪な環境というスラムのイメージが覆された」という感想を何人かの学生から聞いた。スラムを「歴史」をもち、「成長」するものとして見ることで、コミュニティ開発の意義もより明確となろう。一方、よりマクロな都市社会の特質理解という点では、現行の研修内容は不十分である。事前講義や現地でのプログラムに、富裕層や中間層への目配りを加えることで、3)の都市におけるスラムの位置づけもより明確となるだろう。

最後に、住民参加型を特徴とするコミュニティ開発の学びにおいては、学生たち自身の「参加」も重要であろう。たとえば、セブで見学した **Gawad Kalingah** は、国内外の大学生のボランティアを受け入れている。スクオッター地区から移動した住民たちの新しい家の壁のペンキ塗りや庭作りに半日から参加可能であるとのことであった。

引用文献

日本語

- 秋谷公博 2007 年「コミュニティネットワークに支援されたスラムの住環境改善事業における開発のプロセスに関する研究」東洋大学大学院国際地域学研究科博士論文。
- 秋谷公博・藤井敏信 2005 年「コミュニティを対象にした住環境のプロセスに関する研究—アユタヤの事例より」『都市計画論文集』No. 40-3 日本都市計画学会、733-738 ページ。
- アンソレーナ、J. 2008 年『世界の貧困問題と居住運動—屋根の下で暮らしたい』明石書店。
- 遠藤環 2003 年「タイにおける都市貧困政策とインフォーマルセクター論：二元論を超えて」『アジア研究』第 49 巻 第 2 号アジア政経学会、64-85 ページ。
- 2005 年「バンコクの都市コミュニティとネットワーク形成」田坂敏雄編著『東アジア都市論の構想—東アジアの都市間競争とシビル・ソサエティ構想—』お茶の水書房、425-452 ページ。
- 2007 年「グローバル化時代のバンコクにおける構造変化とインフォーマル経済」京都大学大学院経済学研究科博士論文。
- 岡田亜弥 2004 年「貧困と教育」絵所秀紀他編『シリーズ国際開発第 1 巻 貧困と開発』日本評論社、99-118 ページ。
- 小野澤正喜 1994 年「タイ社会解脱の手引き」小野澤正喜編『アジア読本タイ』河出書房、12-36 ページ。
- 柿崎一郎 2007 年「物語 タイの歴史」中央公論新社。
- 川澄厚志 2006 年「タイの都市貧困層コミュニティにおける参加型開発と住民組織の変容に関する研究—居住環境改善における小規模住民組織の活動を通して—」東洋大学大学院国際地域学研究科修士論文。
- 2008 年「タイの都市貧困層コミュニティにおける COD I の住環境整備事業—自立に向けた貧困者のための居住プログラム—」『月刊住宅着工統計』2008 年 4 月、財団法人建設物価調査会、6-16 ページ。
- 城所哲夫 2007 年「スラム地域改善と日本の密集市街地問題のつながりについて考える～世界各国における居住環境改善事業のあり方とその変遷～」『住宅』社団法人日本住宅協会、3-8 ページ。
- 城所哲夫・片山恵美子 2004 年「ベトナム・ホーチミン市における低所得地域の住環境改善にみられる住民参加の形態と住民間関係について」『都市計画論文集』No. 39-2 日本都市計画学会、8-14 ページ。
- 斎藤文彦 2002 年『参加型開発』日本評論社。
- 重富慎一 2001 年「序章 国家と NGO」『アジアの国家と NGO』明石書店、13-40 ページ。
- 下川正嗣 2007 年「タイにおける国際居住年記念賞受賞者の活動現況調査報告」『住宅』

- Vo156、46—70 ページ。
- 高橋一男 2008 年「コミュニティ開発とエンパワーメント—社会運動としてのコミュニティネットワークの視座から—」東洋大学国際共生社会研究センター編『国際共生社会学』朝倉書店、21-36 ページ。
- 塚本拓 2003 年「タイ・アユタヤのコミュニティにおける子どもの環境認知に関する研究」東洋大学大学院国際地域学研究科修士論文。
- 寺田勇文・森正美 1995 年「宗教と世界観」綾部恒雄他編『もっと知りたいフィリピン 第2版』弘文堂、101-126 ページ。
- 長坂格・中野伸一 2000 年「フィリピン」中田実編『世界の住民組織—アジアと欧米の国際比較』自治体研究社、90-111 ページ。
- 新津晃一 1998 年「スラムの形成過程と政策的対応」田坂敏雄編『アジアの大都市〔1〕バンコク』日本評論社、257-278 ページ。
- 秦辰也 1993 年「バンコクの熱い季節」岩波書店。
- 2003 年「タイの都市スラムにおける居住環境改善政策の変遷と住民参加の促進に伴う住民組織（CBO）のネットワーク形成に関する考察」『都市計画論文集』, No. 38-3 日本都市計画学会、313-318 ページ。
- 2005 年「タイの都市スラムにおける住民参加と子ども参加による持続可能なまちづくりに関する研究—青少年と大人の参加による居住環境改善活動への取り組みを中心に」東京大学大学院工学系研究科博士学位論文。
- バビオー、S. L. 1996 年『女性への暴力—アメリカの文化人類学者がみた日本の家庭内暴力と人身売買』明石書店。
- 藤井敏信・安相景 2001 年「アユタヤにおけるコミュニティネットワーク型の住環境整備事業の展開とCODIの役割」『都市計画論文集』 No. 36 日本都市計画学会、445-449 ページ。
- 藤原千尋 2007 年『フェアトレード@Life お買い物でイイことしよう』春秋社。
- 穂坂光彦 1994 年「アジアの街わたしの住まい」明石書店。
- 丸山真純 2007 年「「文化」「コミュニケーション」「異文化コミュニケーション」の語られ方」伊佐雅子監修『多文化社会と異文化コミュニケーション』三修社、187-210 ページ。
- 森谷裕美子 2004 年「NGO活動における少数民族とジェンダー」田村慶子他編『東南アジアのNGOとジェンダー』明石書店、149-183 ページ。
- ナンシー、B. L. 1995 年「家庭内暴力」ライデンフロスト、N. B. 編『転換期の家族—ジェンダー・家族・開発』産業統計研究社、300-301 ページ。
- 山内太 2003 年「親の教育と子供の教育・技能形成—タイ製造業の事例」大塚啓次郎他編『教育と経済発展』東洋経済新報社、253-270 ページ。

英語

CODI 2008 *CODI update projects*, CODI, No5, March 2008.

Swanepoel, H. and F. De Beer 2006 *Community Development: Breaking the cycle of poverty*, Juta Academic.

Etimadi F.U. 2002 *Urban Governance, Partnership and Poverty: Towards Inclusive Urban Governance in Cebu*, The University of Birmingham.

HP

アジア開発銀行 : <http://www.adb.org/JRO/> (08/12/11)

外務省「各国地域情勢」:

<http://www.mofa.go.jp/MOFAJ/area/thailand/index.html> (08/12/11)

外務省「諸外国の学校情報」:

http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/01asia/infoC10600.html (08/12/11).

在京タイ王国大使館 : <http://www.thaiembassy.jp/rtel/> (08/12/11).

在タイ日本国大使館 : <http://www.th.emb-japan.go.jp/jp/consular/index.htm> (08/12/14).

バンコク都 : <http://city.bangkok.go.th/en/main-bangkok-history.php> (08/11/28).

山川昌子 2000年「バンコクにおけるスラム化と過剰都市化論の因果関係と打開策」

<http://www.ritsumei.ac.jp/~yamai/7KISEI/yamakawa.pdf>.

2008年度フィールドスタディ報告書
都市スラムにおけるコミュニティ開発
フィリピン・タイ

東洋大学国際地域学部

編集：秋谷公博・子島進

発行：2009年3月31日